

聖徒の道

1976年1月20日発行（毎月1回20日発行） 第20巻第1号  
昭和42年12月18日第3種郵便物認可



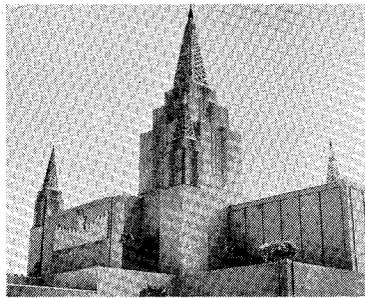
聖徒の道 1 1976



P. 7



P. 11



P. 20



P. 24

# 末日聖徒イエス・キリスト教会

1976 1月号

## 大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

## 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
デルバート・L・ステイプラー  
リグランド・リチャーズ  
ヒュー・B・ブラウン  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレイ  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー

## 諮問委員会

ロバート・D・ヘイルズ  
(内務伝達部長)  
ジョン・E・カー  
(配送翻訳部長)  
ドイル・L・グリーン  
(教会誌編集主幹)  
ダニエル・H・ラドロウ  
(教会教課企画調整主任)

## 国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

## 日本語コーディネーター

八木沼 修一

# も く じ

「きょう」という日に.....	N・エルドン・タナー.....	1
デビー・スイフトハンズ.....	エッタ・リンチ.....	3
毎月第一水曜日に.....		7
「待っただけの価値が.....」.....	J・M・ヘスロップ.....	11
とりひき.....		13
走れ、たいように向かって.....		14
おもちゃばこ.....		16
小さなお友だちへ.....		18
まつじつのしんでんクイズ.....	ビッキー・H・バッジ.....	20
私は山の上に立っているのか.....	デレク・ディクソシ.....	21
忠実なる働き人.....	ローレン・C・ダン.....	24
質疑応答.....		27
ローカル・ニュース.....		30

## 聖徒の道 1月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-8-10  
配 送 東京ディストリビューション・  
センター  
東京都港区南麻布5-10-25  
定 価 年間予約 1,700円 1部 150円  
海外予約 2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

彼女は、死ぬまでタバコもコーヒーも全然飲めないことを思うと気持ちがくじけた。宣教師のひとりはそのような彼女にまず1日だけ断ってみるように、そしてそれができたらまた次の1日だけ試してみるように言った。

きょうが生涯の最後の日  
旅路の最後の日であるなら  
今から精一杯の努力をしたところで  
果たして  
どれだけ価値ある人間になれるのか  
どれだけものを  
神のみもとに携えて行くことができるのか。

(作者不詳)

人生とは一体何か。この有名な詩はそれを端的にとらえている。人は生ま

## 「きょう」 という日に

第一副管長

N・エルドン・タナー

れ、生き、そして死ぬ。それは何のためなのか。自己の存在と永遠の行く末の何かを知り、理解することで、私たちは人生をいかに生きるか、また人生において真実大切なものをいかにして選び、選んだものに対してどう取り組んでいくかを決定することができる。

きょうは元旦。年の始めを迎えて、だれもが心にこう思うことだろう。「きょうは残されたわが生涯の最初の日だ。さあ、きょうから永遠の生命、今も永世にも完き喜びと幸福を味わうことのできる永遠の生命を得られるように準備を始めよう」と。私たち一人一人が望んでいるのは結局このことであり、従って永遠の生命を得る方法を慎重に見出し、その方法に従ってきょうを始めに毎日努力をすることが何よりも大切なのである。

永遠の生命を得るという目的を達成するために私たちは福音を学び、福音に対する知識と理解を深めなければならない。そして学び得たものを毎日の生活に取り入れ、自らの救いのために

欠くことのできない信仰と証を日々強めるのである。そればかりではない。愛する人々やこの幸福と祝福を味わってほしいと思っている人々の生活にも影響を与えることができるのである。

福音は私たちが物心両面の恵みを受けられるためにいかに振舞えばよいかを教えてくれるものである。このことを常に覚えていていただきたい。教会の集會に出席し、聖餐を受け、レッスンに集いながら、家族や隣人や地域社会の人々が必要としていることに耳を貸さず、なおかつ不正直にまた礼節をわきまえずに振舞っているとしたらどうだろう。もちろんそれでは十分とは言えない。

善良で立派な市民であり、慈善事業に寄与し、地域の自治体に奉仕し、ごく一般の善良なキリスト教徒としての生活を送るだけでも十分ではない。このような生活は確かに賞賛に値するものではあるが、天父が御自分を愛しその戒めを守る者に約束されている完き喜びと永遠の生命を受ける資格とを得るには十分とは言えないのである。

聖典の物語を思い起こしてみたい。ひとりの人が救い主に近寄ってきて言った。

『「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか。」』

イエスは言われた、『「……もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい。」』(マタイ19:16、17)

聖典の中には、戒めとは何かということについて、また永遠の生命を得て神と共に住むためのひとつの条件は神の教会、すなわち神の王国において権威ある者から受けるバプテスマであることが、繰り返し述べられている。バプテスマを受け、真の教会の会員となると、私たちはその教会の会員であることに対して責任を負うのである。

私たちは「自らの義務を覚り、任命された務めを勤むべし。然らずばその地位にある値なし」と戒められている。(教義と聖約107:99、100参照)

もし私たちが教会の職に正しく召されたなら、その職に伴う義務がいかなるものであるかは私たちが召した権威ある者の口から述べられるであろう。指導者の地位になくとも、私たちは普

通の教会員として同じように大切であり、なおかつ集會に出席し、その信仰と証によって他の人を励ますという義務を有しているのである。

ではどのようにして真っ直ぐな道を進み、自らの目標を達成して最終的に永遠の生命を得るのだろうか。自らを鍛練すること、そして神が与えたもうた可能性と究極の目的を実現する上で妨げとなる習慣や弱点を日々悔い改めること、これのみである。私たちは、絶えず努力しなければならないことを知っている。ゴルファーは試合に臨む前、一定の時間ショットの練習をするものである。

音楽や絵に秀でるには、だれしも勉強と練習を積み重ねなければならない。そうだとすれば、天父は賢明な栄えある目的があつて私たちをこの地上に置いて下さったのであるから、その天父のみ業を遂行するために準備をすることは、なおさら大切ではないだろうか。

良き業を行なおうと決心することが大切であることを理解したならば、まずどのような決心をするのかを考慮し、何のために決心するのかを考えよう。そして最後に、どんな障害があつても心に決めたことを守り抜くという決意をするために自らを訓練するようにしようではないか。一日の始めに、きょうだけなら決心したことは守れると思うようにしよう。これは実行するにつれて容易になり、習慣となる。

福音を聞いて教会に入りたいと思いつつも、知恵の言葉をなかなか守れない若い女性がいた。タバコとコーヒーを常用していた彼女は、死ぬまでタバコもコーヒーも全然飲めないことを思うと気持ちがくじけた。宣教師のひとりはそのような彼女にまず1日だけ断つてみるように、そしてそれができたならまた次の1日だけ試してみるように言った。ただ一度、それも1日だけタバコとコーヒーのない生活を送ることによって、彼女は知恵の言葉を守れることがわかり、間もなくバプテスマを受けた。何であれ、悪い習慣を良い習慣に改めるときにも同じことが言える。

きょうも一日救い主の教えに一致して生活し、課せられた務めを成し終えたという満足感にひたること、そして

「明らかな良心」を抱いて夜床に就くこと、人生において得られる最高の祝福のひとつはここにるのである。

私たちはまた新しい年、残された生涯の最初の日を迎えた。訓練と決意という二語を心に留めて、今年を自らと自らの家族と隣人にとって良き年、良き生活となるようにしようではないか。次にあげるような決意のもとに一日一日を過ごせたら素晴らしい。もちろんあなた自身が決意していることで、ここにないものもあろう。

「きょう」という日に

天父に熱心に祈る

私に導きを与えて下さる聖霊の勧めに耳を傾ける。

祈りによって神と御子イエス・キリストに対する私の愛を述べ、隣人への奉仕を通してその愛を示す。福音を学び、福音に対する理解を深めるよう努力する。

まず神の国と神の義とを求めらる。

神の予言者の勧告に耳を傾け、心に留める。

誓約と戒めを守る。

言葉と模範によって人々に福音を教える。

言葉と行ないによって家族に対する愛を示す。

何事にも正直に振舞う。

課せられている仕事を果たすために準備をする。

きょう、だれかに親切にする。

すべての祝福に感謝の気持を述べる。

最後に、信仰箇条第13条に見られるような決心をし、それを常に実行に移すことに勝る道はない。「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく、われらはすべてのことを信じ、すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば、あらゆることを堪え忍び得んことを望む。もし何にても、徳高きこと、好まじきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。」



## デビー・スイフトハンズ

エッタ・リンチ

19歳のデビッド・スイフトハンズはオクラホマ州のノーマンから20キロの所に、家族と一緒に住んでいた。コマンチ族のインディアン、デビーは古い愛車のエンジンをいじっていた。と、デビーの後ろの野菜畑に続く門が開き、祖父がやって来た。祖父のオスカー・スイフトハンズは長年白人社会で暮らしていたが、いまだにコマンチ語を話し、銀髪がかった髪を肩まで長く垂らしている。房のついた鹿皮の靴をはき息子にいくら言われても背広を着ようとしない。黒皮靴はいつこうに底が減らなかった。

1台の車が、ハイウェイをスイフトハンズの家の方に走って来るのが見えた。「おじいちゃん、弱ったなあ。フレッドおじさんだよ。」「そうだ。だが、どうして弱るんじゃ。フレッドの車で卒業式に連れて行ってもらはずじゃったに。」

デビッドは腕時計をちらっと見て言った。「おじさん、2時間も早いよ。土掘りをしてるおじいちゃんや車のグリースだらけのぼくを見たら、どう思

うだろう？ 急いで洗わなくちゃ。」

「いんや。」祖父の指が年に似合わない力でデビッドの腕をつかんだ。「親父の一番上の兄に何も逃げ隠れせんてい。」「おじいちゃんも隠れるじゃないか。フレッドおじさんが来ると畑に出て、会わないじゃない。おじさんはおじいちゃんの子なんだよ。」

「そうだな、凶星だ。だがわしは年だ。おまえは若い。おまえはあいつたちの世界に合わせていかにゃならん。たぶん兄貴のジョニーのようにじゃなく、もっと別の方法でな。わしはもう遅すぎる。」

「おじいちゃん、まだ71だよ。ぼくがジェニーと結婚して、ひ孫の顔を見るまで長生きしてくれなくちゃ。」

老人はにっと笑いながら言った。「ジェニー・ロングジャンパーのためにも、お呼びをちょっと待ってもらうわい。」

ふたりは一緒になって笑ったが、老人は急に真顔になって言った。「おまえのガールフレンドは、油だらけのおまえの手をどう思っているんじゃ。」

「ジェニーは、ぼくに一番好きなこ

とをしてほしいんだよ。」デビッドは自信たっぷりに答えた。

「ならば、おまえは自分で道を見つけにゃならん。ジェニー・ロングジャンパーと一緒に幸せになれる道を。父さん、母さんにわかってもらえる道をな。」

「見つけるなんてできないよ。」デビッドは寂しげにつぶやいた。「大学に行け行けってうるさいの、知ってるだろう。高校卒業するのに、どんなに勉強しなくちゃならないか、おじいちゃん、知ってる？ 大学は1年だってつとまらないよ。なのにジェニーの父さんたちは、ジェニーに大学出の人と結婚させたがっているんだ。」

老人はよろよろと木の下での固い椅子に歩み寄って、ゆっくり腰を下ろした。「わしら部族の呼び名はスイフト・ウィズ・ザ・ハンズじゃった。のう、おまえの先祖はバッファローを殺し、だれよりも速い矢を射った。手は誰よりもスイフト（速い）でな、だれよりも確かじゃった。おまえはちゃんと道を見つかる。」

「そうだといいいね。」デビッドは、車から下りたフレッドおじさんに笑顔で手を振った。しかしぎこちない笑顔だった。彼は自分をとやかく言う人たちに腹立たしさを感じ、後ろを向くと中古部品が乱雑に積まれている中からパッキンを選んで、また車の修理を始めた。家族はその部品の山がみっともないと、よく文句を言っていた。

すると出し抜けに後ろのドアの所に父親が姿を見せ、「デビー！」と呼んだ。「こちらに来ないか？」

「はい。」デビッドは足ばやに歩き始めたが、父の近くに行くにつれ、のろくなった。「何の用なの？」

「早く手を洗いなさい。フレッドおじさんがおまえに話があるそうだ。」

デビッドは二の足を踏んだ。「車の修理が終わってからでもいい？」

父親はデビッドの油まみれの手を見て、まゆをしかめた。「そんなこと後にして、すぐに来なさい。」

デビッドはまっ黒なグリースをごしごしこすり落として、それから居間に行った。父母と兄のジョニーとフレッドおじさんがいたが、デビッドが入っていくとぴたっと話をやめた。デビッドはもじもじしながらおじさんに言った。「こんにちわ、フレッドおじさん。」

大柄なコマンチ族のフレッドおじさんは、ぬっと立ち上がった。デビッドよりも15センチ背が高かった。着ている黒い背広にはひとつのしみもなかった。「やあ、デビッド、父さんの話じゃ、グリースを落とすのにちよいと時間がかかると言うのでな。」

「はい、洗ってきたんです。」デビッドはコチコチになって言った。「ぼくにお話があるそうですが。」

「そうだ、大学のことだよ。デビー、君の父さんは私が成功しているのを見て、私の話ならと言うんだ。なあ、私がかもし大学を出ていなかったら、こんなにいい給料ももらえなかっただろう。」

デビッドは守勢に立って答えた。「でも、だれでも大学に向いているわけじゃないです。」

「それはそうだ。だが君はインディアンだ。大学教育がせひとも必要だ。土にまみれているおじさんを見なさい。教育があったら、71になってもまだましな仕事ができただろうに。」

「おじさんは立派な仕事をしてい

ます！ 食べる物を作っています。お金をかせぐのを基準にするならば私たちはみんな役立たずです。」デビッドは断固として言った。

「要はこうさ。君は教えている大学で卒業式の講話をするような父さんと泥だらけのおじさんと、どちらのようになりたいかだ。」

デビッドはしばらくの間、こみあげた怒りをぐっとこらえ、そして静かな口調で言った。「フレッドおじさん、野菜作りだって立派な仕事だと思います。」

「デビー、フレッドおじさんの言うことはもっともだ。」父親が言った。「これからの一生を、爪にたまったグリースをほじくり出して過ごしたいのか？ 手を見てみなさい。すぐに大学に行かねばならん。おまえの手は人様の前に出せるような手じゃないじゃないか。」

デビッドは思わず指を曲げて爪を隠した。「ぼくがみっともなくして恥ずかしいって言えばいいんだ！」

「そうは言っていない。」父が言った。

「弁解なんかしなくていいよ、父さん。」デビッドは父から母に視線を移し、次いで兄のジョニーを見た。ジョニーは自分のきれいな爪をためつすがめつしていた。みんなデビッドに反対だった。「ジョニー兄さんみたいになれないって、心配しているんだろ。兄さんなら、大学の成績も将来性も自慢の種だもんね。ぼくが平凡な労働者にしかならないと思って心配なんだろ。みんなはぼくが恥ずかしいんだ。」

そう言ったものの、デビッドは口から出た言葉を後悔した。だれかが反論してくれるのを願った。しかしみんなはデビッドから視線を移したままで、それがデビッドの言葉の正しさを物語っていた。デビッドはたまらなく寂しくなった。

母親が無理に笑顔を作って立ち上がった。「さあ、食事にしましょう。出かける前に後片づけがすむわ。」

「ぼく、行かない。」デビッドが宣言した。

「行かないだと！」父親がショックを受けたらしい様子で言った。「どうかしてるんだ！」

「ぼく正気だよ。」デビッドは語気を強めて言った。「油だらけの手が恥ずかしいんならぼくついて行かないよ。」

母が穏やかに彼をたしなめた。「デ

ビー、そんなふうに言わないで。そんなつもりじゃ……」

「そんなつもりなんだよ、母さん。」デビッドはきつと後ろを向き、部屋を出て野菜畑の方へ歩いていった。生まれて初めての深い孤独感を感じながら彼は車の修理を始めた。それから2、3分すると、母が玄関から彼を呼んだ「デビー！ ジェニーよ！」

めいいた気持の中でも、ガールフレンドに会えると思うと笑顔に戻って、デビッドは足ばやに家に向かった。

「ジェニーはおじいさんとこよ。きょうはなんだかとてもきれい。一緒に出かける約束があったんじゃない？」と、母が言った。

「いいんだよ、母さん。ぼくがどうして行かないか、わかってくれるのはジェニーだけなのさ。」

デビッドは、あつけにとられて上がり口に立ちつくしている母を後に、居間に入って行った。祖父はお気に入りいつもの椅子に腰かけ、ひざ頭の間で指を組んでいた。ジェニーは明るい黄色の服を着て、長椅子に腰かけていた。デビッドにはまるで黄色いページの花のように見えた。彼女は、小麦色のすらとした腕にはまった時計を見て言った。

「おふたりとも急いだ方がよくてよ。みんながそろわなければ、出かけられないわ。」

デビッドは深呼吸をしてから言った。「ぼく、行かないんだよ。」

「まさか！」ジェニーは椅子から飛び上がるようにして叫んだ。「だってお父さんの講話があるのよ！」

「かまわないさ。その方がいいんだ。」

デビッドが入って来てからずっと黙っていた祖父が、初めて口を開いた。

「どうかしたのか、デビー。」

「みんなぼくのこと、恥ずかしいんだよ。ジェニーの家の人とおんなじさ。大学に行かないで車いじりをしてるから。」デビッドはそばの椅子に身を投げ出すようにしてすわり、ぼんやりと宙を見つめた。「ジェニー、おじいさんとふたりで行っといで。ぼくは父さんの説教なら、母さんに聞かせるのを何百回だって聞いているもん。」

「そんな問題じゃないわ！ 家族みんなで行くのよ。あなただけいかなかったら、みんなの噂になるわ。」

「ぼくのすわる場所なんてないさ。」



祖父がすっくと立ち上がり、年というより数々の敗北を経験して曲がっている丸い背中を、しゃんと伸ばした。その姿には往年のコマンチ族の勇士のおもかげがよみがえり、不屈の気迫がしのばれた。

彼は胸を張って言った。「わしの孫のおる場がないとなれば、わしのおる場もないわ。」そしてドアの後ろにかかっているくわを手に取り、まっすぐ野菜畑へ歩いていった。

ジェニーは口をとがらせ、長いため息をついた。「ほーら、ごらんささい。お父さんが卒業講話をなさるのを、どんなに誇りに思っていたらしたか、あなた知ってる？おじいさんは話がとても聞きたかったのよ。」

「そんなのぼくの知ったことじゃないよ。」デビッドは一步もひかずに答えた。「みんなはおじいさんが畑を耕すのを馬鹿にしてるんだ。ぼくの油だらけの手がみっともないのとおんなじに。」

「デビッド、あなただって同類よ。鹿皮の靴をはいてコマンチ族の衣裳を着たおじいさんと外出したくないでしょ。」

「違うよ。みんなおじいさんのこと愛してないけど、ぼくは愛している。」

「そう。愛しているんだけど、一緒にどこかに行くのは恥ずかしいってわけね。」

「そりゃ違うよ！」

「あなたは、おじいさんが昔ながらのコマンチだから恥ずかしいのよ。そうでしょ。あなたや私の家の人たちが労働者のあなたを恥ずかしがるよりも

もっと悪いわ。あなたが愛する人にそんなふうにしかにできないなら、私たちの結婚だって、よく考えてみなくちや！」

「君にそんなふうにしかに理解してもらえないんじゃ、ぼくたち結婚しない方がいいかもしれないね！」デビッドは声高に叫んだ。

「妻をひとりで行かせて、みんなの笑いものになるような夫なら、結婚は待った方がいいと思うわ。」ジェニーは怒って部屋を飛び出し、ドアを後ろ手でバタンと閉めた。

ひとり残されたデビッドは身じろぎもせず、肩をがっくり落としていた。だれがどうでも、ジェニーにだけはわかってもらえると思っていたのだ。しばらくして、デビッドが野菜畑へ行くと、祖父がかしの木陰でくわを支えにじっと空を見つめていた。

「おじいさん、行かなくちゃだめだよ。ぼくが父さんたちと言い合したからって、おじいさんまで出かけないでいることないよ！」

「いや、わしは行かない。」老人はふっとつぶやいた。

と急に、だれかの足音が聞こえた。デビッドの父親だった。「デビッド」父は口ごもりがちに切り出した。「フレッドの車が動かないんだ。」

「来るときには調子が良かったよ。どうしたの？」

「動かないんだ。もう遅刻だ。町まで20キロもあるんだし。見てくれるか？」

デビッドは笑ってやりたい気持ちをぐっとこらえたが、次には断わってどう

なるかを見てやろうという衝動に駆られた。しかしそれもこらえて、顔にやっと会心の笑いを浮かべ、立ち上がった。「道具を取ってくる。」

デビッドはメタルの道具箱を手に、落ち着き払って車に近づいた。父親と祖父が後ろからついていった。デビッドはびかびかの車のボンネットを開け、おじにエンジンをかけてくれるように頼んだ。彼はエンジンのまわりをいろいろ調べて、故障の箇所を見つけた。

「何が悪かった？」父親がさっそく尋ねた。

「ローターがこわれてる。」

「元になおせるか？」

デビッドはにやりとしたのを抑えて言った。「ひとつはもう使えない。交換しなくちゃ。」

「だが、どうする。新しいのはないぞ。」

「捜してみるよ。」デビッドは大またでガレージに行き、中古部品の山をひっくり返してみた。そしてやっとローターを見つけ、急いでおじの車に戻ってこわれたローターと交換した。おじがエンジンをかけると、車は無事走り出した。

「ありがとう。」デビッドの父が笑顔で感謝した。「さっきはすまなかった。ごめんよ。車で町に来てくれないか。おじいさんもありがたいだろう。」

デビッドはうん、行くよと、のどまで出かかったが、父の気持を楽にするような言葉は、意地もあって口にできなかった。デビッドは父の真剣なまなざしに会おうのを避けて、車のモーターに目を落とした。

父がまた腕時計を見た。「もう行かなくては。デビー、助かったよ、ありがとう。」

デビッドと祖父は、ハイウェイに曲がって行く車を見送った。デビッドは苦々しい顔で言った。「手を油だらけにしているぼくをからかたくなに。車の修理を頼んだんだ。」

「おまえが怒るのはもっともだ。デビー。おまえがいなければ、頭でかちの息子どもは、立派な車でまだここにすわりんぼうじゃ。晴れの場で大勢を前に話をするのを頼まれるのはいいことだ。だが、その場にどうやって行けるかを知るとのもいいことだ。」

祖父のどことなく寂しげな口調は、デビッドの胸をゆさぶった。「ほんとは行きたかったんだろ、おじいさん。」

「いや、たいしたことないわい。」

「でも父さんの話が聞きたかったんだろ。みんなが父さんの話を聞いているのを見たかったんだろ、ねっ。」

老人は答えをためらっていたが、やがて口を開いた。「どんな様子かはここでもわかる。」

「さあ、急いで着換えようよ。遅れるけど、そっと入って後ろの席にすわればいい。」

「あのまっ黒の服を着にゃならんかな。」

「好きなのを着たらいいさ。『手を使って働く男』って、自分で自分のこと決めたんだろ。」

それから40分後、ふたりは大学の講堂にそっと入って行った。総長がデビ

ッドの父を紹介しているところだった。デビッドは拍手の嵐の中を、祖父の先に立って、講堂の後ろの壁ぎわの空席まで行った。数人の人たちが、老人の房のついたコマンチ衣裳を珍らしげに見ていた。デビッドは恥ずかしかった。だから祖父を人前に連れて行くのはきらいだったのだ。

デビッドは、家で何回も練習しているのを聞いたので、スピーチには関心がなく、もっぱらジェニーを捜した。彼女は家族と一緒にすわっていた。それと中央席の通路を隔てて、母がジョニーとフレッドおじさんにはさまれてすわっていた。その通路側に空席がふたつあった。デビッドと祖父の席だった。

突然、祖父がステージを指さした。デビッドは祖父をちらっと見て、すぐ父に視線を移した。

「真に教育ある者は……」父が話していた。「教育にさまざまな形のあることを知っております。学問的な知識を望む人には、学位がその答えとなりましょう。我々は我が大学から巣立つ知性豊かな学生諸君を喜びとするものであります。」

デビッドは背すじを正した。それは聞いたことのない言葉だった。

「しかしながら、我々はまた別の知識も必要としております。」低いのはっきりした父の声だった。「我が文明社会は機械に依存しており、学位を持つ人々も、鉛管や冷蔵庫や自動車を修理する人を必要としておるのです。」

デビッドは顔を輝かせて祖父を見た。何と素晴らしいことだ！

「おのが手を使って働くことの中には美と尊厳があります。」父の話は続いた。「インディアンが土にまみれて働くおかげで、我々はいもやトマトやとうもろこし、南京豆、アボカド、その他の作物を享受しております。ところが、爪がひびわれ、油に汚れているからと、学問社会は彼をさげすむのであります。しかしその人がおのが仕事に秀でているなら、我々は彼を評価し、彼とその知識とに負っていることを認めるべきであります。それなくして、我々の文明は立ち行きません。」

「ねえ、おじいさん」デビッドはささやいた。「前の席に行って、みんなと一緒にしようよ。」

老人は立ち上がった。背中はおもはや敗北で曲がってはならず、ぴんとまっすぐに、誇り高く伸びていた。デビッドは祖父の腕を取ろうとするのをやめて、通路へ足を踏み入れた。その日は彼の日でもあるのだ。かくしゃくと、誇り高く、助けなしに歩かせよう。そろって堂々と、ふたりは前方の空席へ向かって歩いた。頭を高く上げ、衆人の注視を受け止めながら。

デビッドの父が話をやめ、聴衆も待っていた。静寂は当惑ではなく、敬意のそれだった。

ふたつの空席に、まず老人をすわらせ、ついでデビッドがすわり、母にほほえみかけた。母の黒い瞳は涙であふれた。デビッドはステージを見上げた。父は愛と誇りを満面に、笑っていた。

それだけではなかった。何よりもうれしいことがあった。

式が終わってから、ジェニーが人ごみをかき分けて、デビッドの隣りに立ち、目を見上げてほほえんだ。それから彼女の両親がデビッドの手を握り、ベン・ロングジャンパーが彼を「息子よ」と呼んだ。すべてを物語る言葉だった。





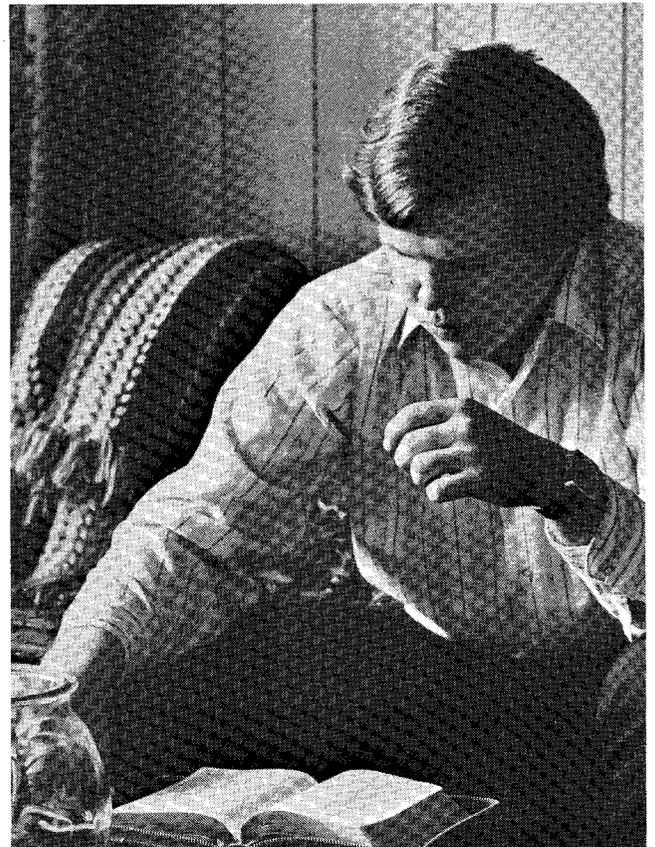
バートはジュニア・ホームティーチャーですが、同僚が約束の時間に行けるかどうか、問題はないかどうかなど、必ず確認をとります。シニア・ホームティーチャーには往々にして非常に忙しい人が多いため、一緒に働くジュニア・ホームティーチャーが、約束の時間を確認するようになれば非常に助かります。バートの同僚は、一度だけ約束を忘れたことがありました。そのときも、バートが連絡したので、仕事を全部やめてとんで来てくれました。ですからその晩は、約束に数分遅れただけですみました。

## 毎月第一水曜日に

ホームティーチャーの召しは、バート・ヘイルズにとって、とても大切なものです。バートはロムニー副管長の助言に従って、この義務を果たそうと務めています。

「ホームティーチャーの務めを果たす義務は、メルケゼデク神権に聖任される時、またアロン神権の祭司と教師の職に聖任される時、同時に与えられるものである。……ホームティーチングという奉仕により、神権者は自分の召しを全力を尽くして遂行し、次のような偉大な約束にふさわしくなるのである。『およそ忠実にして……その天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは、「みたま」により聖められてその肉体再新さる。』また、その召しを全力を尽して遂行する神権者たちは、偉大な約束にふさわしい者となり、『教会員にして王国の民となり神の選民となる。』」(Church News「チャーチ・ニュース」1969年4月19日号p.16)

バート・ヘイルズは召しを全力を尽くして遂行してきたことによって、自分でも大きく成長したと感じています。良いホームティーチャーとは何でしょうか。またどうしたらバートのようにうまくいくのでしょうか。では、バートたちと一緒にホームティーチングに行ってみよう、どのようなことをしているのか見てみましょう。



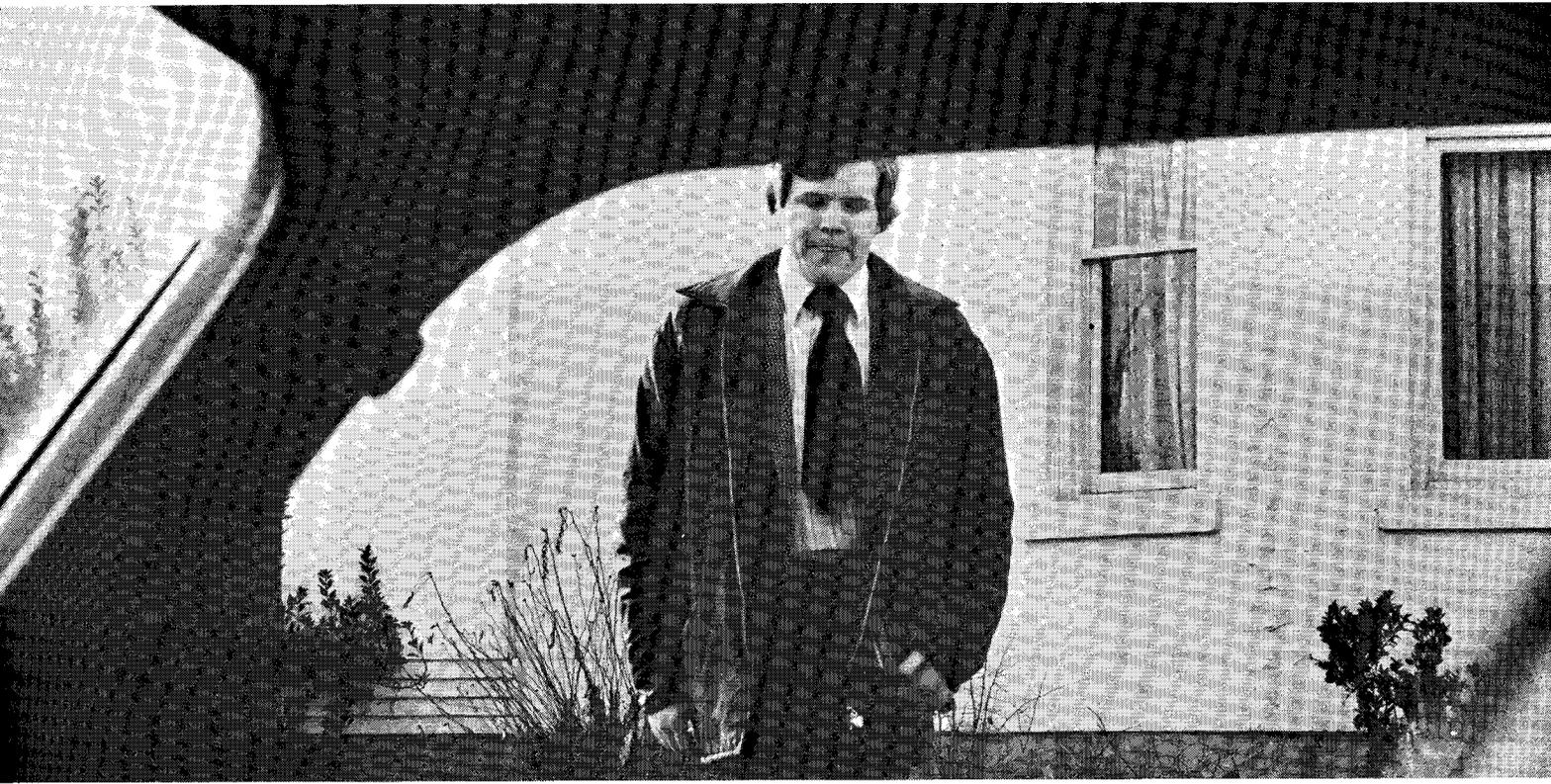
バートと同僚は、1ヵ月交代でレッスンを担当しています。バートは、勉強と祈りによってメッセージを伝えることができるよう、その責任に熱心に取り組んでいます。

パートが言うには、ホームティーチングには、大きな目的がふたつあります。ひとつは、病気の人がないか、必要なものはないかなど、担当家族の実態を把握することです。もうひとつは、子言者や大管長の代理として、福音のメッセージを伝えることです。

パートの同僚は近くに住んでおり、家の前で待っていれば車で迎えに来てくれることになっています。現在、パートと同僚は2家族を担当しています。両方とも遠くに住んでいるため、車が必要なのです。両方の家族とも、他の用がない限り、毎月第一水曜日にパートと同僚が訪問してくれるのを楽しみに待っています。このように、前もって時間を決めておくと、家族にもホームティーチャーにも便利です。



パートは、ホームティーチングのとき、見苦しい服装で行かないよう、特に気をつかいます。ネクタイをしめたり背広を着たりすることだけが霊性のすべてでないことは知っていますが、服装を整えることにより、自分はホームティーチングを特別な責任と考えている、という印象を訪問家族に、与えることができます。



バートは同僚に親しくあいさつします。バートは、同僚がとても忙しいことを知っています。ですから、一緒に時間が過ごせることをとても感謝しているのです。多分、バートの同僚がだれか、おわかりでしょう。そうです。バートの同僚は、N・エルドン・タナー副管長なのです。タナー副管長にホームティーチングに行く時間があるのなら、世界中どこをさがしても、良いホームティーチャーになるのに十分な時間がないなどと言える人はいないはずだとバートは思っています。



タナー副管長とバートは、まずスノ一家族を訪問します。バートはレッスンでワード部のひとりの若者が不慮の死を遂げたことに触れています。スノ一家族に、「監督は葬儀のとき、この若者は十分に死に対する備えができていたと言っていました」とレッスンしています。バートの今夜のメッセージは、人はいつ死ぬかわからないので、常にその備えをしておく必要がある、ということなのです。

バートが言うには、ホームティーチングでタナー副管長の同僚であるということは、素晴らしい責任でもあるし、同時にまた、素晴らしい機会でもあるそうです。バートは、自分が他の人々の模範にならなければいけないことをよく知っています。



バートの話によると、タナー副管長は、よくワード部の青年に、福音が真実であることを知っているかどうか尋ねるそうです。この質問をされると、確かにそのことをしっかりとまた深く考えるようになります。

タナー副管長とバートは、次にゲアリー一家を訪問します。タナー副管長と一緒にホームティーチングの経験を積むことにより、バートはこれまで随分成長してきました。聖徒たちを訪問して、彼らを祝福するという責任の重要性を、バートが忘れることは決してないでしょう。自分が天父の「みたま」をその家族にもたらしていることを知っているからです。

「そは、わが僕らを受け入るるものはわれを受くればなり。

また、われを受け入るる者はわが父を受くるなり。

而して、わが父を受け入るる者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。(教義と聖約84：36-38)



# 待つだけの 価値が……

J・M・ヘスロップ

セッセルは若くハンサムなエスペン・アムンゼンを愛していましたが、ふたりで神殿に行けることがはっきりしないうちは、結婚しないつもりでした。

セッセルは8歳のときから教会員でした。そして、それまでずっとお母さんから、福音の原則、特に神殿結婚の大切さを教わっていました。

でも、ノルウェーでは教会員の少年たちとデートすることはなかなかむずかしいことでした。

セッセルはこう言っています。「学生時代にエスペンに会ったんです。ダンスを申し込まれてそれからデートに誘われました。彼は教会員ではありませんでした。けれども私は彼が大好き

で、1年くらいデートを続けました。

私は最初から教会のことを彼に話しました。彼は、私が信仰を持つのは良いことだと思っていました。一緒に教会に出席したこともありますが、彼は自分には教会があわないと言いました。」

エスペンが続けてこう言いました。「彼女は僕に、神権者でなければ結婚しないと断ったんです。彼女の方はどれだけ真剣だったかわかりませんが、僕は彼女を愛していました。まず結婚して、宗教のことはそれからの話だと、つまり彼女を説得できると思っていたんです。1年デートした後で、僕はイギリスの学校に行きました。休暇には会いましたし、手紙も書きました。でも彼



女は、神殿結婚ができるめどのたないうちは、結婚しようと言ってくれませんでした。ぼくはそこどころがどうにも理解できなかったんです。」

夏休みのデートが4年も続きました。「私たちはもうおしまいだと思います。エスピンのことはお祈りしていましたし、彼をととても愛していました。でも、神殿結婚が大切なことを知っていたので、どうしてもそれ以外の結婚はしたくなかったんです。4年してから、私は彼に『さよなら』しましょうと言いました。私は別の人たちとデートして、その夏は一度もエスピンと会いませんでした。」

その同じ夏に、私は母と一緒にイギリスの神殿へ行きました。そこで私は死者のためのバプテスマを受けました。イギリスにいる間、私はエスピンの名前を神殿の祈りの名簿に書きました。」

彼もその夏は別の少女たちとデートしましたが、ふさわしいと感じる相手はいませんでした。

彼は言っています。「セッセルにたまらなく会いたくなりました。電話しようと思いたったのは、彼女がちょうどイギリスから帰ったときのことでした。彼女にデートを申し込んで、ぼく

は教会のことを勉強すると約束しました。」

しかしデートはたった3回きりで、大学の最終年度が始まるので、イギリスに帰らなければなりません。学校はイギリスのレスターにありましたが、そこで宣教師と会いました。教会の住所を調べて、どんな様子か見に出かけたんです。ちょうど同じ年頃の青年が教会のそばに立っていたので、『教会の集会は何時に始まりますか』と尋ねました。すると彼はニコニコしながら、『もうすぐですよ。一緒に行きましょう』と言ってくれました。

それから宣教師のレッスンを受け始めたのですが、セッセルには内緒でした。宣教師に言われた通りのことをして、断食をし、祈りました。

でも、祈っても何の答えもないようでした。しかしそれでも、答えがあったらそれに従おうと決意して、祈りを続けました。すると、自分の答えが得られたんです。教会が真実だとわかりました。」

そのとき、セッセルも祈っていました。

「私には、エスピンが必ず教会員になるという確信がありました。当時私

はスウェーデン航空のシュワールデスで、休暇を取ってイギリスへ行きました。エスピンに会いに行ったのです。『あした、バプテスマを受けるよ』と彼に言われたときの私の喜びをお察しただけだと思います。」

夢が現実になったのです。

セッセルとエスピンは、5年ほど交際した後で結婚しました。アムンゼン姉妹は、神殿結婚のできる人と結婚したいという決心を強く守り抜いたので、

結婚後まもなく、アムンゼン兄弟は軍に召集されました。1年間教会員として生活した後で、休暇の許可を得て、神殿で結び固めを受けました。

「私たちは本当に幸せでした。主に近い生活ができて、主から『私はあなたがたを知っている』と言われているような気持でした。」

ふたりはオスロに家を持ち、アムンゼン兄弟は織物の仲介を仕事にしました。そして1年して独立しました。

現在アムンゼン家には3人の子供がいます。彼らはいつも一緒に家族で活動します。

最近になって、ノルウェー・オスロ伝道部のゴスタ・バーリング伝道部長は、アムンゼン兄弟をオスロ第2支部の支部長に召しました。アムンゼン兄弟は即座にその責任を受けました。

彼はこう言っています。「迷うことなど全くありませんでした。祝福師の祝福で、あなたは指導者になると言われたからです。でもこの責任がどんなに重いものかわかっていたので、どうしたら召しが果たせるか心配でした。しかし妻と話をしている、神殿で主と交わした誓約を思い出したのです。それで私はこの召しを受けました。」

私はすべてを教会中心に考えています。神殿に入るたびに新しいことを感じ、家族一緒に生活が永遠に続くことを再認識します。」

「そうなんですよ。」アムンゼン姉妹が言いました。「教会のおかげで、私たちはお互いに必要としているものを満たす一番よい方法が何であるか、わかりました。家族が一緒にいるというのは素晴らしいことです。私たち家族はとても忙しいですけれども、とても幸せです。」





# とりひき



ある春のことです。ジェイコブとウォルターは、小馬にのってインディアンのキャンプの方へ、歩いて行きました。お父さんのいいつけで、馬をうりに行くのです。風がそよそよとふいて、木や草がとてもきれいでした。

キャンプにつくと、フランクしゅう長がやって来て、とりひきがはじまりました。「おとなのように、やるんだよ。」ジェイコブは、おとうとのウォルターにいいました。しゅう長がもって来たもうふを見て、あたまをよこに、ふりました。しゅう長は少し考えて、もうふをもっと、もって来ました。ふたりは、かおを見あわせました。こんなにもらって、よいのでしょうか。

小馬のせにゆられながら、とくいでしか

たがありませんでした。家につくと、お父さんは、目をまるくしました。そして、半分くらいとると、いいました。「かえしておいで。」

くらい気もちで、ふたりはキャンプに行きました。しゅう長は、ふたりを見ると、いいました。「きっと、かえしにくると思っていたんじゃ。あんたがたのお父さんは、しょうじきな人じゃ。わしらにとっても、お父さんなんじゃよ。」

ふたりは、にっこりとわらいました。春の日は、とても明るくかがやいていました。

ジェイコブ・ハンブリン (1819-1886) は、ブリガム・ヤングの十二しとで、インディアンのでんどうぶをつくった人です。

こやの中は、まだまっくらだった。

「おきろ、キー」 おじいちゃんの声で、キーは目をさました。そうして、ぼうをつかんで、外へとび出した。

山が、とおくにかすんで見える。走れ、あの山を目ざして。草むらをとびこし、さくをのりこえ、走って、走って、走った。しんぞうが、とび出しそくに、ドッキン、ドッキンとうっている。

山が明るくなってくる。走れ、ぜん力をふりしぼって、金色のたいようの光が、のぼってくる。ああ、日の出だ！

赤いいわに、さっと光がさした。

キーは、スピードをおとし、その地面に、ぼうをつきさした。きょうはここまで走ったんだ。

キーは、おじいちゃんのことばを、思い出した。「まい朝、たいようにむかって、走るんじゃ、力いっぱいにな。今に、山のふもとまで行けるようになるわい。そうしたら一人前じゃ。」

まい朝、まい朝、キーは走った。

山は、まだまだとおくにあった。キーは思った。「山のふもとまでなんて行けっこないや。おじいちゃんの、ばかやろう！ あしたは、てきとうなところで、やめちゃおう。」

キーは、こやへかえっていった。

「？……へんだな。なんだか、むなさわぎがする。こやから、けむりが出していない……。あれっ、おじいちゃん

のパイプがおちている。」

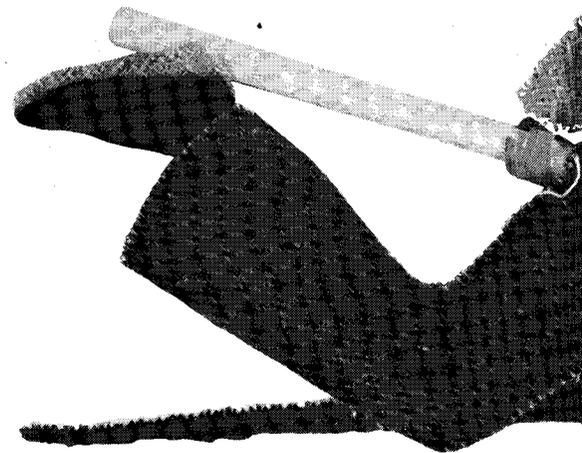
キーは、こやの中にとびこんだ。「おじいちゃん！」 ときどきはうるさかったけど、キーは、やっぱり、おじいちゃんがすきだったんだ。

どこへ行っちゃったんだろう。しんぞうは、しんぱいで、こおりつきそうだった。

うめき声が聞こえる。キーは、外へとび出した。

「あっ！ おじいちゃん。」 おじいちゃんは、まるたの下じきになっていたんだ。「まって、今たすけてあげる。」力いっぱい、どけようとした。でも、だめだった。

「キー、ホスチンのところへ行って、



お話：コリーン・ヘルキスト  
え：ニーナ・グローバー

走れ、たいように  
むかって

たすけをよんできておくれ。お前の手は、まだよわい。じゃが足はつよい。」

「よし、まってね。」 キーは走りだした。のをこえ、やぶをけちらし、走った。走った。

とうとう、ついた。ホスチンのこやだ。ああ、よかった。男たちが、おじいちゃんを、たすけに行ってくれた。

キーは、ほーっと、ためいきをついた。山が、ゆう日で、いろいろな色にそまっていた。心にしみるほど、きれいだった。キーは、こうつぶやいた。

「おじいちゃんは、ばかじゃない。あした、また走ろう。たいようにむかって。……」

(おわり)

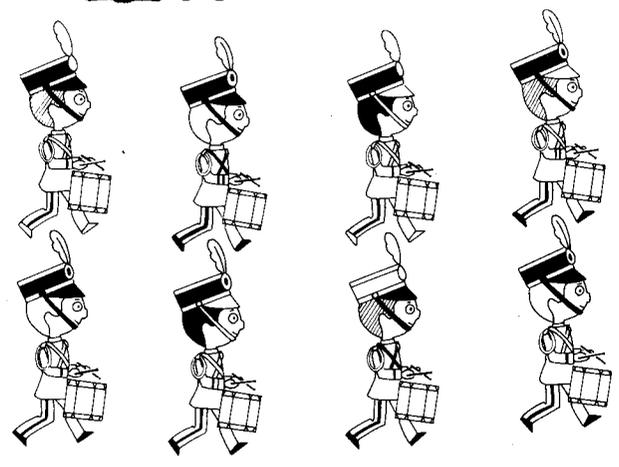


# おもちゃばこ

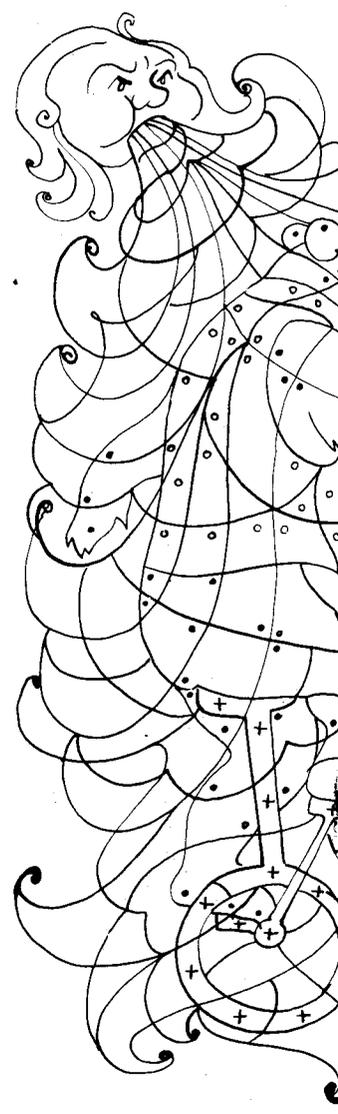
## ドラマー・ボーイ

おなじドラマー・ボーイをさがしましょう。  
わかるかな。

マーシャ・ドス

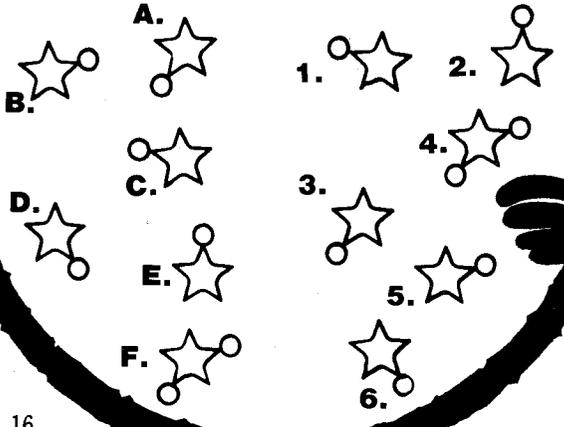


あれっ！ぼうしがふきど  
のかな。+はくろ、○はあ  
ってみましょう。だれのぼ

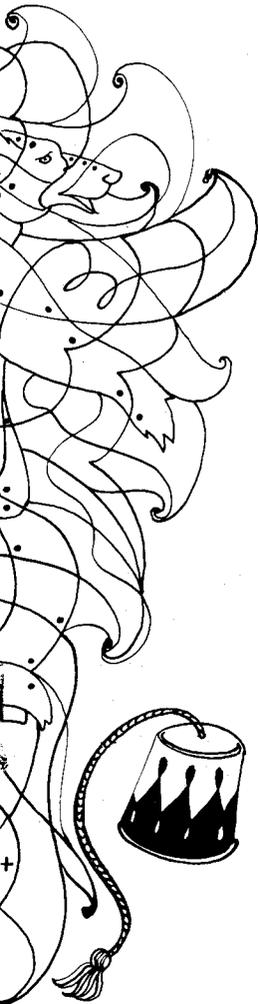


AからFまでのほしで、1から6まで  
のほしとおなじものはどれでしょう。

リチャード・ラタ



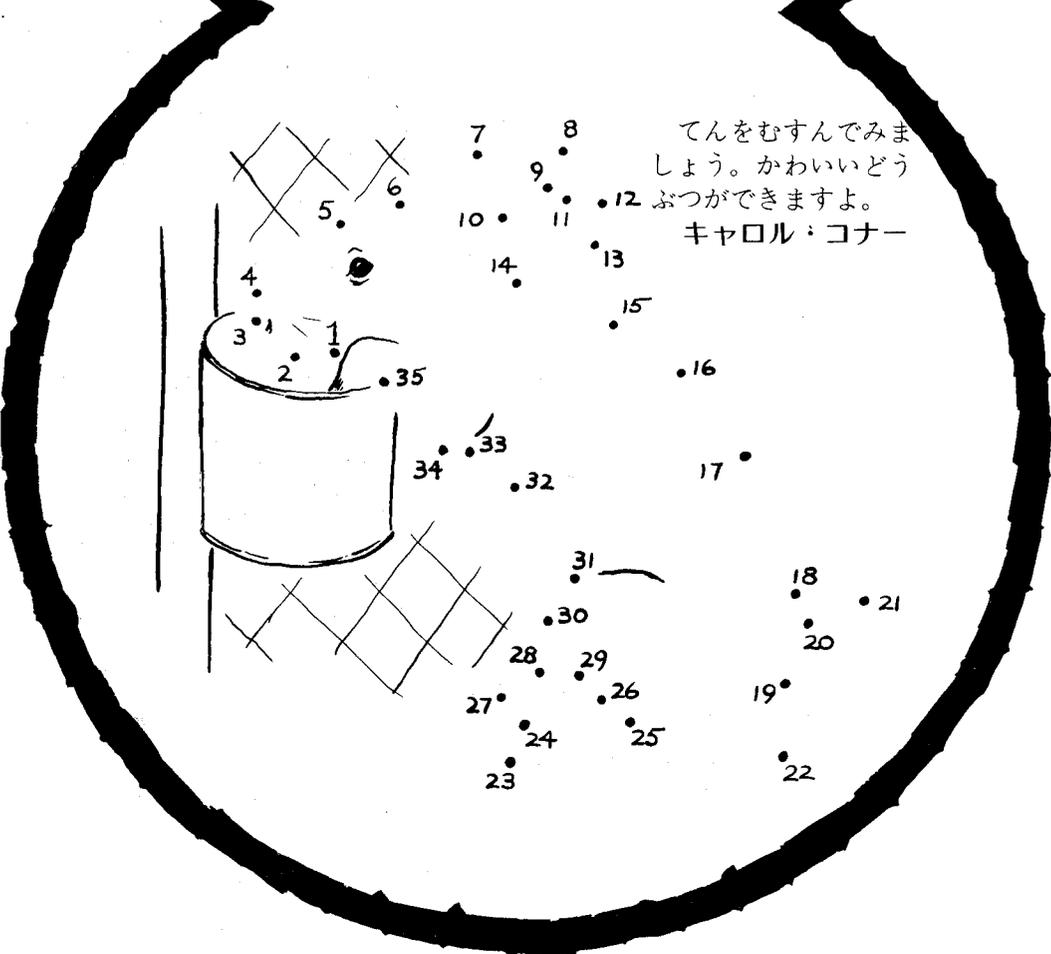
ばされちゃった。だれ  
か、●はちゃいろでぬ  
うしか、わかりますよ。  
アン・ステイシー



なにがかくれているのかな

ネバ・シュルツ

アザラシ、クジラ、ハーブ、マキガ  
イ、ピーナッツ、カメラ、テント、ペン  
ギン、はね、バット、タコ、エスキ  
モーのいえ  
ぜんぶみつかったかな。



てんをむすんでみま  
しょう。かわいいどう  
ぶつができますよ。  
キャロル・コナー

# 小さな お友だちへ



ブラウン長老のお孫さんたちは、ブラウン長老について、こんなふう

に語ってくれました。  
「わたしが9さいくらいのとき、おじいちゃんは、よく大きないすにすわっていました。わたしは後ろに立って、そのきれいなかみの毛をとかしたものでした。おじいちゃんは、されるままになっていました。まん中から分けて、いろんなふうの、後ろにとかしたり、横分けにして流行のかたちにしたたり、顔の前にたらしたりしました。おじいちゃんは、とてもがまん強く、いつもわたしのうでが、先につかれてしまいました。」

「おじいちゃんの思い出という、自分で作って聞かせてくれた、おもしろいお話です。わたしたちは、おじいちゃんの足もとにすわって、耳をかたむけました。たいてい、長への科学ぼうけん物語でした。物語の中には、いつも妹とわたしが出てきました。

こんな物語を作ってくれたんですよ。わたしたちは、自動車ですばくの中を走っていくうちに、地面にあって大きなあなを見つけました。あなのおくには、いろいろな宝石や、すばらしい宝物がありました。それから食べ物も、たくさんありました。あなのそこでは、湯がにえくりかえっていましたが、幸運にもボートを見つかることができました。ボートにのれば、あつい湯にさわらなくてすみます。わたしたちは、みんなボートにのって、川を下って行きました。こういう物語の中では、たいていいつも、1度か2度、きょ人か何か、おもしろいものに会いました。そして、おじいちゃんと、妹とわたしは、たいていいつも戦って勝ちました。わたしたちは、このようなおもしろい物語を何時間も聞いたものでした。そのころ家には、テレビは

これは、ジョリーン・ミアデイスが、ヒュー・B・ブラウン長老(十二しと)と、その孫たちに会ったときのお話です。

ありませんでしたが、テレビなんか、いらないうらいでした。

おじいちゃんはいつも、ひじかけいすにすわって、ランプの光で本を読んでいました。おじいちゃんのすきな予言者はニーファイでした。そして、いつもニーファイのように生きたい、ニーファイのようになりたいと言っていました。」

ブラウン長老と会ったとき、わたしは、少年時代のことを話してください、とたのみました。その話は、とてもユーモラスでした。

「子どものころ、兄のバドとわたしは、おもしろいことを、たくさんしました。バドはわたしをからかったり、だましたりするのがすきでした。ある日わたしたちは、あなの中のイタチを、つかまえようとしていました。シャベルを使って、ほり出そうとしました。でも、だめでした。バドは、「あなに手をつっこんでごらんよ。つかんで、ひっぱり出せるかもしれないよ」と言いました。わたしは、それを信用して、できるだけ深く、手をつっこみました。イタチは、イヤというほど指にみつつき、指がちぎれそうになりました。それからというもの、バドが何かをしようとするたびに、用心するようにな

りました。

子どものころ、兄はいつもわたしをいじめました。でも一度、し返しをしてやったことがあります。わたしたちは当時、なやの地下室でねていました。バドは、おばけの本を読んでいました。ある日わたしは、よいことを思いつきました。いとこに古いシーツをかぶってもらって、バドをおどかさうというのです。いとこは、バドが帰ってくる前に、なやの地下室にかくれていました。そして、わたしは外にいて、じっと目をこらして、まっていた。思ったとおり、バドは帰って来て、なやの戸口から中へ入り、地下室へおりて行きました。バドは、いとこのすがたを見ると、さけび声をあげて、なやからとび出し、一目さんに走って行きました。それからしばらくの間バドはそこでねむりませんでした。」

ブラウン長老は、馬についてのすばらしいけいけんを話してくれました。ブラウン長老はカナダのきへいたい働いていたので、馬をととても大事にしていました。

「わたしは、そのあたりで一番よい馬をさがしていました。馬がすきで、いつもせわをしていました。わたしはついに、よい馬を見つけ、たくさんお金をはらって手にいれました。そして、すぐに馬の調教のうまい、きしゅをやといました。かれは、わたしの馬であるスチームボートを、よくくんれんしてくれました。そして間もなく、スチームボートは、見かけだけではなく、のりごちの点でも、カナダのきへいたいの中で一番よい馬になりました。「ねころべ」とか「ころがれ」とか「来い」とか、めいれいすると、すぐそうするのです。わたしは、とてもまんぞくでした。

わたしたちは、そのころカードストーンにいました。スチームボートと



から、どんなに長いあいだ、つまらない毎日をおくったことでしょう。

ブラウン長老は言いました。「1年後、ぐん隊の用事でイギリスに行ったとき、馬小屋を見にきそわれました。ずっと見ていくうちに、その中にまじって、わたしのだいな友だちがいるのを見つけました。『スチーマー』わたしはさげびました。

スチーマーは、打たれたように、はね上がりました。わたしは馬小屋の中に入って行き、馬の首にうでをまわして、なきました。古い友だちを、わすれることはできなかったのです。」

また、主のしもべであるブラウン長老は、祈りがどれほど大切かということそして、いつもあかしを持っていたことを話してくれました。次の話から、それがよくわかります。

「小さいころ、夜こわいゆめを見ると、目をさまして、『お母さん、いる?』とよびかけました。母のへやは、わたしのへやのとなりでした。母はわたしの声を聞くと、すぐこう答えてくれました。『はあい、ここにいますよ。』

何年か後、わたしはイギリスへでんどうに行きました。母は、わたしがよんでも、母はそこにいないこと、しかし、天のお父さまがいつもおられることを、話してくれました。

でんどうしているとき、そしていつも、わたしは『お父さま、そこにいらっしゃいますか?』とよびました。

年をとった、りっぱな、美しい白いかみのこの人は、しばらくの間、めいそうにふけていました。そして、静かにこう言いました。「いつも、わたしは答えを受けました。」

いっしょに、楽しく2、3年すごしたある日のこと、ウイニペグからわたしたちの所に、ウォーカー大佐がやって来ました。将軍用の、よい馬を買うためでした。大佐は、最初そのことを言わず、こう言いました。

「いい馬を持っているそうだね。」

「ええ、とびきりいい馬ですよ。」わたしはこたえました。大佐は、のらせてもらえないか、と言いました。わたしはこたえました。「いいですよ。」

大佐は少しのってみて、おりと、わたしにたずねました。「いくらで売るかね。」

大佐は、じょうだんを言っている

のだと思いました。わたしも、じょうだんのつもりで言いました。「まあ500ドルですね。」それはとても高いねだんでした。

「買った!」

わたしは、あっけにとられてしまいました。「じょうだんですよ。この馬は、わたしのほこり、わたしの喜びなんです。」どもりながら言いました。

ウォーカー大佐は、きつとしたしせいになって、言いました。『きみは、ねだんを言った。金をはらおう。それだけだ。』

わたしは、わたしの喜び、わたしの友スチームボートがいなくなつて



# まつじつのしんでんクイズ

ビッキー・H・バッジ

テンプルということばは、ラテン語のテンプルムから出たことばで、主の家といういみです。まつじつせいとは、主のみわざのためにしんでんをたてるようにと、いつも強く教えられてきました。ヒントを読んで、しんでんの名前を書いてください。下にあるものの中から、えらびましょう。

1. このしんでんは、開たく者やそのしそんがたてました。1893年、このしんでんが、けんどうされるまでに、3つのしんでんが、かんせいしました。

2. ジョセフ・F・スミス大かん長は、15さいのとき、この島にけんどうに来ました。1915年には、大かん長として、このしんでんを、けんどうしました。

3. カナダの開たく者たちがたてた、しんでんです。1923年、ヒーバー・J・グラントがけんどうしました。

4. さばくの中のしんでんで、レーマン人のためのしんでんとしてもゆうめいです。1927年、ヒーバー・J・グラント大かん長が、けんどうしました。

5. ヨーロッパでさいしょの、しんでんです。1955年9月15日、デビッド・O・マッケイ大かん長が、けんどうしました。

\_\_\_\_\_しんでん

6. ポリネシアのせいとたちのための、しんでんです。1958年に、マッケイ大かん長が、けんどうしました。

\_\_\_\_\_しんでん  
7. ヨーロッパで2ばん目のしんでんです。

\_\_\_\_\_しんでん  
8. さいきん、アメリカの東部にたてられたしんでんです。

\_\_\_\_\_しんでん  
9. アジアで、はじめてのしんでんです。

\_\_\_\_\_しんでん  
10. そのほかのしんでんです。

マ\_\_\_\_\_しんでん

ロ\_\_\_\_\_しんでん

セ\_\_\_\_\_しんでん

ア\_\_\_\_\_しんでん

ロ\_\_\_\_\_しんでん

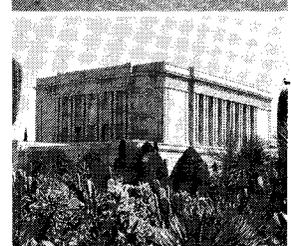
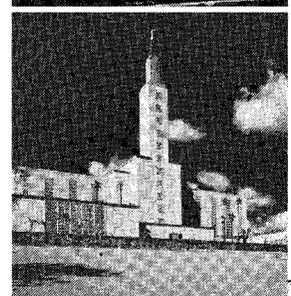
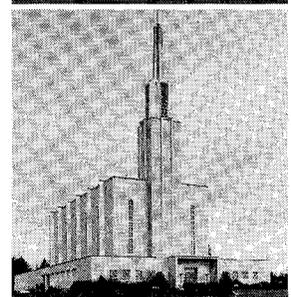
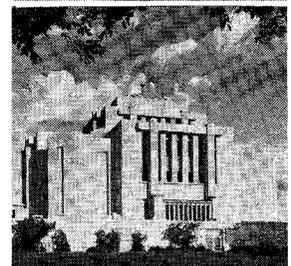
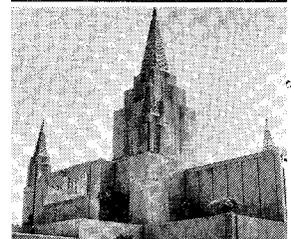
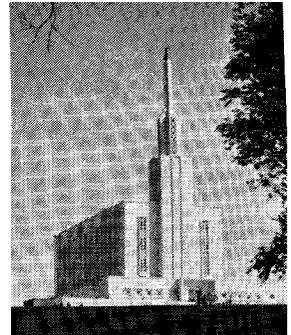
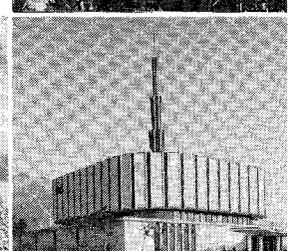
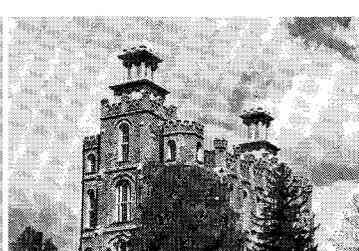
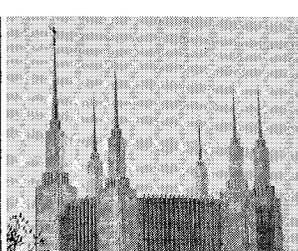
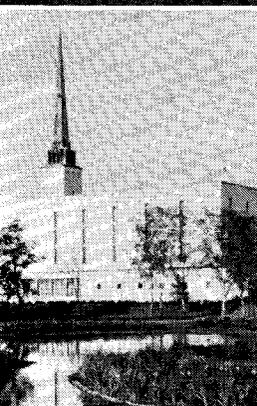
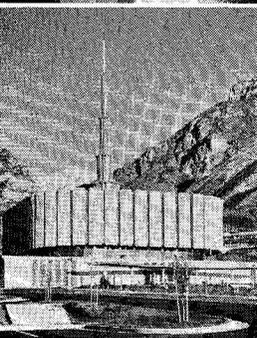
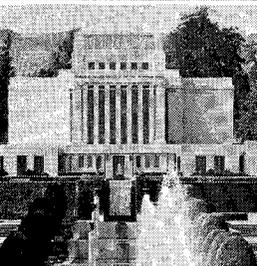
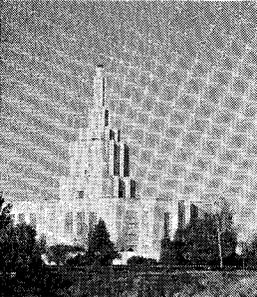
オ\_\_\_\_\_しんでん

オ\_\_\_\_\_しんでん

プ\_\_\_\_\_しんでん

ブ\_\_\_\_\_しんでん

ソルトレーク、スイス、アイダフォールズ、ローガン、アリゾナ、プロボ、トウキョウ、オグデン、ワシントン、ロンドン、セントジョージ、マントイ、ニュージーランド、ハワイ、アルバータ、ロサンゼルス、オークランド、ブラジル



# 私は山の上に 立っているのか

自分が実際に伝道をするなど  
とは、いささかショックなこと  
だった。

デレク・ディクソン

「それですね。」支部長は言った。「あなたを支部の伝道アドバイザーに召したいんです。仕事は教会員と宣教師の間の連絡を取ることと、それから、人の救いという問題について、率先して人々の関心を盛り上げていただくことです。この大事な仕事をぜひ先頭に立ってやってほしいんです。」

「いえ、まさか、ご冗談でしょう。知らない人に時刻を聞くのさえ不得手なんです。自分が救われるのにも四苦八苦なんですから、人を救うなんぞ、何をかいわんやです。」私は答えた。

「いいえ、そんなことはありませんよ。」

支部長はいつもの穏やかな調子で言った。「足りないものは経験だけです。それは時がたてば自然に備わりますよ。手始めに、今度の日曜日の神権会の伝道プログラムの準備をして下さい。兄弟たちに熱意を持たせ、隣りに福音に対して興味を持ってもらうにはどうしたらいいか、何かのヒントを与えるような計画をお願いします。」

私は支部長に笑顔を返そうと努めたが、心臓はドキドキ、恐れで目の前が真っ暗になった。しかし、おかしなことに、われ知らずこんな言葉が口を突いて出た。「はい、支部長、私にできるとおっしゃるなら、頑張ってみます。」

その週私は、みんなが眠った真夜中に枕を涙で濡らしながら、何とか不思議な方法であの恐ろしい責任から逃れさせて下さいと天父に懇願した。しかし天井が冷酷に重くのしかかるようで、何とも言えない不安が全身に押しつぶされて来る。それで私は、では助けを願おうと決めた。

私の願いに対する答えはあまりに早く来たので、啓示以外の何ものでもないと感じている。構想が次々と浮かんできて、鉛筆をつかんでそれを書きとめるのに間に合わない程だった。そうして安息日がやって来るまでに、隣人や知人に、どうしたら福音に対する興味を持ってもらえるかを話す用意がどうやらできたのである。

神権会で、私はざっくばらんに6つの原則を提示した。それは次の通りである。

1. 友だちになろう
2. きっかけを作ろう
3. 手伝おう

4. 勇気を持とう
5. 成功をこの目で見よう
6. 靈感を受けよう

そして私は7つめの原則を、自分だけに言い聞かせた。自分が手本になろう

最初のうち、私は臆病を克服するのがまだむずかしく、それが一番の障害になって、あまり福音に興味を持ってもらえなかった。しかしある日事務所で、初めてのチャンスに巡り合った。ひとりの独身男性が新しく赴任して来て、私に建物の案内の役目がまわってきた。彼と肩を並べて歩きながら、私は勇気をふるい起こして言った。「ところで、あなたはカナダでモルモン教会の人に会ったことはありませんか。」

彼は私をまっすぐ見つめた。「どうしてですか。あなたはモルモンですか。」

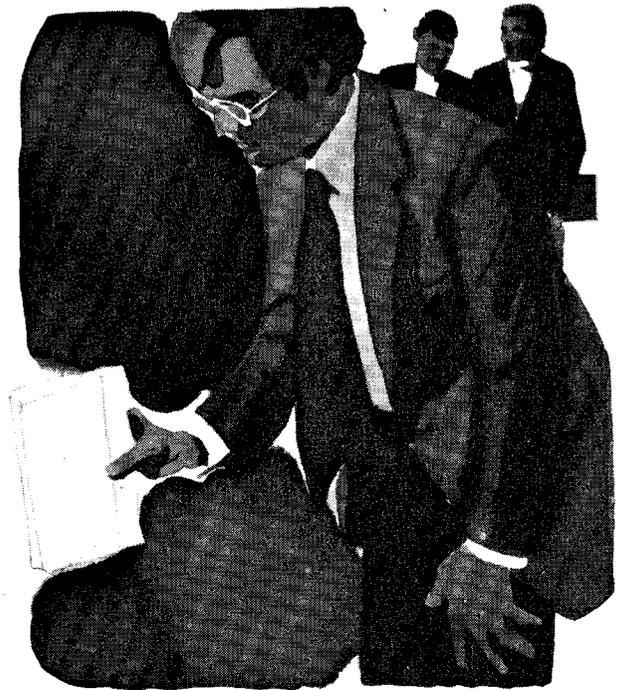
「ええ、そうなんです。」

「そうですか、それはおもしろい。モルモンは個人的には知りませんが、テレビで金曜か土曜にソルトレークシティの大会とか言うのをやっていました。ひとり白髪のおじさんが話をして。あんなに柔和な老人はめったに見ませんねえ。彼は立派でしたよ！」

私はそのときに、神の予言者のみたまがその男性の心の扉を開いて、それからの数週間にわたって福音について非常に良い話ができるように導いてくれたのだと知った。

二度目の伝道の経験は私にとっては苦い経験だったが、一生忘れることのできない教訓となった。

私はある晩仕事の帰りに、混雑したバスで席に腰かけながら、「予言者ジョセフ・スミスの教え」を読んでいた。私の隣には、たくさんの買物包みをひざの上に乗せた中年の婦人がいた。





私は本に熱中していたので、降りるまで、隣の乗客をちらっとも見なかった。家が近くなって私が本を閉じると、隣の婦人が言った。「その方は立派な方でしたか？」私はびっくりして、不審げに聞き返した。「だれのことですか？」

「あなたが読んでおいでの、ジョセフ・スミスです。」

「彼は本当に偉大な人物でした。神の予言者です。」

「イエス・キリストのように？」

「いえ、そうじゃありません。でもキリストの僕の中でも最も偉大な人物のひとりです。」

そのうちに私の降りる停留所が来て、彼女がそれからどこまで乗って行ったか知らずじまいだった。

バスが発車したときに窓越しにその婦人と目が合い、あのときの彼女のもっと知れたような様子は、思い出すたびにどうして彼女の停留所まで乗って行かなかったかと悔やまれてならない。あれからバスに乗るたびに彼女はいないかと捜してみるが、いまだに会えないでいる。

ゆっくりと、私は経験によって成長した。あるいは登り坂、あるいは下り坂と、しかしそれが主のみ業であることは一度も疑いはしなかった。そして1969年の8月のある日、私は、主のみ業を手伝いたいと思う者に助けのあることを知った。

週のほとんどもを昼休みは事務所で過ごしていた私は、その日もデスクに足を乗せて、本をめくりながらサンドイッチをばくついていた。しかしその日に限って、何かもやもやとした不安がつかまとい、ゆううつで落ち着かなかった。

私はそんな気持で、消化によくないだろうにサンドイッチをさっさと口に押し込んで、気晴らしにブライトンの町へ出てみた。

私はしばらく町をぶらぶらと、ショーウィンドーをのぞきながら通りに沿って歩き、本屋に入って立ち読みをしたりしたが、それでも気持は晴れないのでさらに散歩を続けた。

それから私は、かねて出入りの、地下が安売り専用になっている古本屋の前に来た。(安売りとなると目がない私は、おかげでよく金欠病になるので、ここ何ヵ月も店にご無沙汰していた)

私は店に入って、安売りの地下へ下りて行った。人かげはまばらだった。私は手頃な掘出し物の本を目当てに棚を拾い読みしていったが、さて本を捜そうとしたときに階段に靴音が聞こえて、黒服に白い詰めカラーの牧師がふたり、地下へ下りて来て棚から本を捜し始めた。

私は彼らにちょっと注意をひかれたが、彼らは私を格別気に留めなかった。

そうするうちに、ひとりがもうひとりの方を振り返って言った。「モルモン経を1冊、ぜひ欲しいと思ってるんですがね。」

私の耳はピンとそばだち、心臓が高鳴り始めた。

もうひとりの牧師がぶっきらぼうに言った。「あなたは実に物好きだなあ。サザンプトンの私たちの近くにモルモンの教会が新しく建ったが、まだ集会には行って見たことがありませんよ。フレッド、いずれにしても、私は長居できないんで。1時にベティーと会う約束なんです。あなたとまたお会いできるのは来年になりますね。」

「そうですね。」フレッドと呼ばれた牧師が言った。「じゃ、お元気で！」ひとりが深靴をばたばたさせて階段を登って行き、フレッドという牧師はまた立ち読みを始めた。

主のみたまが、私の心にまるで火のように燃えあがった。

「失礼ですが、私は残った牧師に話しかけた。「モルモン経のどれをお捜しですか。初版ですか？」

「いや、ただ読んでみたいだけで。」

「そうですか。もし名刺がいただけたら、喜んでモルモン経をお送りしたいのですが。」

「いやあ、それじゃ、あなたはモルモン？」

「はい、そうです。」

「ほう、これはまた、不思議なことに。」

「そうですね。しかしなぜモルモン経に興味をお持ちですか。」

「いや、私はエセックス州北部の独立長老教会の牧師として、信者と一緒にいろいろな教派の勉強をしているんです。先だつての土曜日に何人かでテレビを見たんですが、『ブリガム・ヤング』という題でした。それが非常に印象深かったので、今度はモルモン教を勉強しようということになったんです。それでモルモン経を捜していたんですよ。」

「私がお送りしますよ。」

私は彼から名刺をもらって別れた。私たちはどちらもこの奇遇に非常に驚いた。何百マイルも遠くからやって来た彼と、昼休みの散歩に出た私が、ブライトンの片隅の古本屋の地下で、モルモン経の話をするなどとは。

私は彼の名刺に簡単な説明を添えて伝道本部へ送ったが、その結末がどうなったか知らない。しかし主の靈感があったことは信じて疑わない。

私はそれまで伝道に努めてきたが、どれもこれも主がすべてなさったという事実の棒は突き破れなかった。私が実際にだれかに働きかけて福音に対する興味を湧かせたということが皆無だったのだ。私の前には渡るべき河があり、私はそれを渡らなければならなかった。それでも、見ず知らずの人に話しかけたり、知らない家の扉を叩いたりして福音を紹介するとなると、考えただけで鳥肌だつてきた。私の心には抜けなければならない関門があった。私は自分の門で知らない人を迎えようと決意した。

さて、支部集会所でハロウィーンパーティーが開かれた晩、私の娘のスーザンが段ボールと壁紙でふたの開くお棺を作り、ひと晩中その中に入って歩きまわり、大成功だった。

その翌朝、私は丘のふもとの停留所で出勤のバスを待っていた。数人待っている人がいて、その中に少し頭がはげでこわそうな顔つきをした太った中年男性がいた。私は、こんな人は福音を受け入れられないものだとか、彼に話しかける勇気などとうていないとか、しかしともかくも何と行って話しかければよいだろうとか、あれこれ理屈を考えながら、心の中で自問した。するとそのとき、内なる声がこう言った。「勇気を持とう。」そこで私は勇気をふるい起こして彼に話しかけた。「失礼ですが、ボール紙のお棺を買ってくださる人をご存知ありませんか。」

彼の頭がぎくっと上がり、警戒する様子で私を見すえた。それもそのはず、無理もなかった。「何ですって？」

「ボール紙のお棺を買いたいと言う人をご存知ないですか。あの、昨晚私たちの教会でハロウィーンパーティーをしたんですが、娘に死人の役でボール紙のお棺に入ってもらったんです。いらなくなったお棺が部屋を占領しているんで、どうしたものかと弱っているんですよ。」

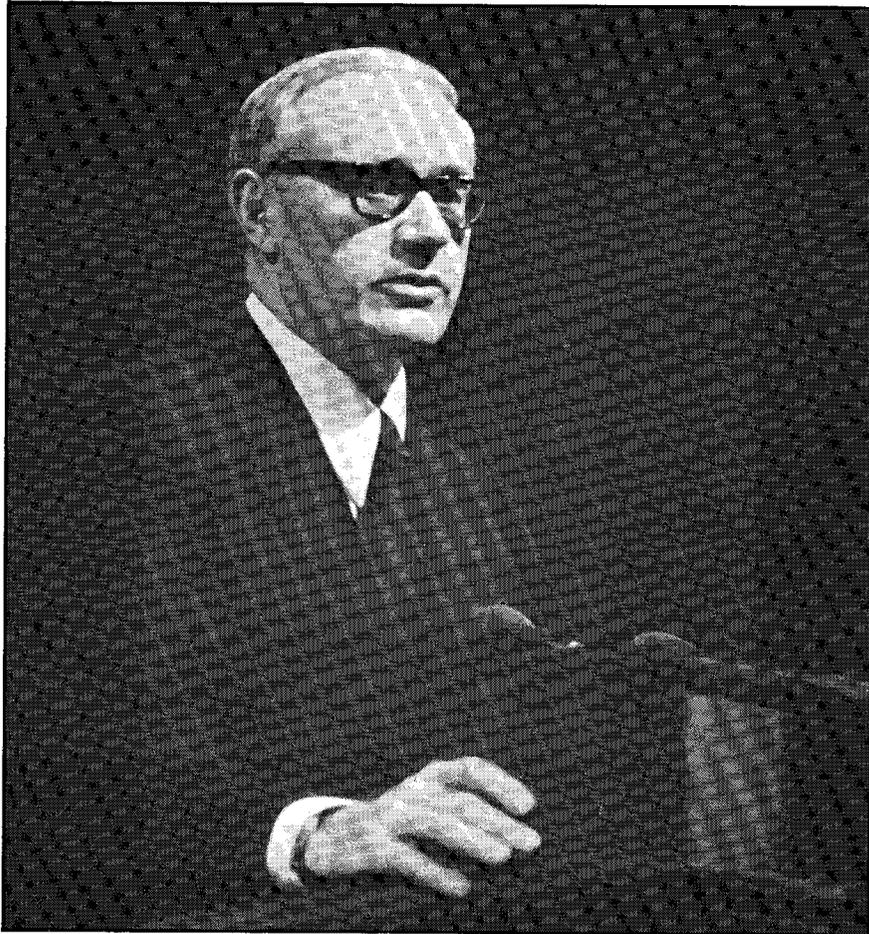
私は、「何という教会ですか」と聞かれるのを待っていたのだが、案に反してそうは聞かれなかった。彼はこう言った。「やあ、これはこれは、見上げたユーモアのセンスをお持ちですな。」

そして私たちはふたり一緒に吹き出してしまった。彼の提案で、バスは待たずにふもとの町まで歩くことになり、道みち彼は私を見つめてこう言った。「いやあ、町なかでまったくの他人にあんなふうにびっくりすることをおっしゃるなんて、まったくの気狂いか、腹にいちもつある御仁ですな。で、あなたがたの教会は？……」

(デレク・ディクソン兄弟は、英国ロンドン南伝道部、ブライトン支部長の責任にある。)



# 忠実なる働き人



七十人最高評議員会会長  
ローレン・C・ダン

愛する兄弟姉妹の皆さん、ここ数カ月、スペンサー・W・キンボール大管長は私たち教会員に、神の他の子らに手を差し伸べるよう勧告してこられた。

私たちはふたつの面で、歩みを早めるように求められている。第一は、全教会員が自分の光を輝かせ、その模範によってイエス・キリストの福音を人々に知らせるようにすることである。主は教義と聖約の中で私たちに言っておられる。

---

---

## 伝道で犠牲を

## 払った人々への献辞

---

---

「われ、再び汝らに告げて一つの誠命を与う。汝ら長老、祭司、教師また会員に至るまで、あらゆる人々精力を尽しその手の働きを尽して為すべきことを為し、わが命じたることを準備し且つこれを為し遂ぐべし。また汝らはすべて温和にしてへりくだり、皆ことごとくの人その隣人にとりて警めの声となる教えを説くべし。」(教義と聖約 38：40、41)

教会の全家族は、非教会員の家族と

家族ぐるみで親しくなることが大切である。

第二に、若い男子はできれば全員、専任教師として伝道に出る準備をすることである。再び教義と聖約から引用しよう。

「この故に汝力を尽して、忠実なる働き人をわが葡萄園に呼び込み、以てこれを最後に葡萄園の刈り込みを為すべし。彼ら真に悔い改めてわが完全なる福音を受け入れ聖き者とならば、われ審判の手を止めん。この故に、汝出で行きて高らかなる声を挙げ『天国は近づけり』と言ひ、また『ホザナよ、いと高き神に御栄あれ』と叫べ。進み行きて水のバプテスマを施し、わが来る時の為にわが前に道をととのえよ。そは、時近ければなり。何人もその日その時を知らざれども、そは確に來らん。」(教義と聖約39:17-21)

これが、つまりは私の話したいことである。私は恵まれて、先日サモアのアピア伝道部を訪問する責任を与えられ、幾つかのステーキ部大会にも出席した。宣教師たちは皆元気いっぱい、み業は進展していた。ある日の午後、集会を終えた後で、サモア人のバトリック・ピータース伝道部長は、「ダン長老、お見せしたいものがあるんですが」と、私を誘った。それから私たちは一緒に伝道本部から数キロ車に乗り、小さな丘の崖になっている所を登って、やしの木や熱帯植物で囲まれた場所にたどり着いた。私はそこが古い墓地であることを気づいた。墓地の中央には、またげるくらいに低いセメントの壁に囲まれた所があった。ピータース伝道部長夫妻は、サモアで最初の宣教師が何人か、そこに埋められていると教えてくれた。墓は8つあった。

私の興味をひいたのは、8つの墓の4つまでが2歳以下の幼児で、ひとりが21歳の母親の墓だったことである。彼女たちはサモアでどんな伝道をしたというのだろうか。

私はその後2日間、暇を見つけては、その疑問を解くために伝道部の歴史を調べた。あの8人の全員についての資料は集められなかったが、そのときに次のようなことがわかった。

教会の初期には、結婚したばかりの夫婦が伝道に召されることは珍しくなく、そのような夫婦が数組サモアにやってくる。あの墓地に埋葬された最初の人は、カティー・エライザ・ヘイル・メリル姉妹であった。彼女たち夫婦が赴任してわずか3ヵ月後、姉妹は病気に罹って未熟児を産んだ。その子は翌日亡くなった。歴史にはこう記されている。「子供が死亡して1時間後、その母親は自らも伏す枕もとにリー姉妹(伝道部長の妻)を招いて看病のお礼を言い、『お迎えが来ているからもう行かなければならないので』自分は『じきに死ぬ』と話した。それから夫と話をし、別れのキスをし、息をひきとった。母親と赤ん坊は一緒に棺で埋葬された。」メリル兄弟は伝道終了後、妻子の遺骨をユタへ持ち帰って埋葬した。

トーマス・H・ヒルトン長老とサラ・M・ヒルトン姉妹はサモアで伝道中、1891年から1894年までの間に子供を3人失った。ジネットは1歳足らず、ジョージ・エメットはたったの7日、トーマス・ハロルドは1歳半の命であった。

トーマス・ハロルドの死について、このような記録がある。「11日、日曜日、トーマスは気分がすぐれなかった。……その後2日間、回復したかには見えなかったが、14日の朝、母親が再び彼の様子を気にするほどに悪化した。そして、あらゆる手が尽くされたにもかかわらず、トーマスの容態は日を追って悪化の途をたどり、遂に1894年3月17日に死亡した。

ああ、その現実を私たちはだれもが信じることはできなかった。愛する姉妹が福音のために愛する親や友を遠くに残して、まともな子供に先立たれた姿を見るのはなんと切ないことか。

トーマス・ハロルド・ヒルトンは1歳半の愛らしい子供で、どの宣教師からも、彼を知る土地の人々からも非常にかわいがられた。人々は、子を亡くした両親に大きな同情を寄せ、彼らのために主の祝福を祈った。」

29歳のランサム・スチーブンスは、サモア伝道部長の召しにあったときに腸チフスにかかり、心不全をひき起こ

して、1894年4月23日に死亡した。

未亡人アニー・D・スチーブンス姉妹は、5月23日、汽船で帰国の途に就いた。彼女は6月10日、日曜日にオグデンに到着したが、そこでジョセフ・F・スミス大管長とフランクリン・D・リチャーズ長老に会った。翌6月11日にはソルトレーク・シティーで大管長会と面接をし、それからサンピート郡フェアビューの実家へ向かい、午後6時に家に着いた。

歴史にこう書き残されている。「友人たちの挨拶は短かった。スチーブンス姉妹の具合が悪く、早々に床に就かねばならなかったためである。帰宅してから5時間後の午後11時に、彼女はかわいい男の子を出産した。」スチーブンス姉妹は身重の体で、試練の一から十までを耐えたのである。

1900年3月2日金曜日の記録もある。

「(アピアの)療養所で、幼いロイ・ロバーツはスタフォード医師から見放された。忍耐強いけなげな病人は、毎日癒しの儀式を受け、そのたびごとに苦痛は和らいだ。……両親(E・T・ロバーツ長老夫妻)は苦しみを軽くしてあげようと、寝もやらずに看病した。」

3月3日土曜日、「幼いロイは朝、療養所で亡くなり、伝道部の歴史にまた悲しい日を記すこととなった。」墓石の言葉は軽い驚きを誘う。「おやすみ、かわいいロイ、おやすみ」彼は1歳半であった。

次にウィリアム・A・ムーディー長老と新妻アデリア・ムーディー姉妹へと話は続く。彼らはアリゾナ州グレアム郡サッチャーから伝道に召され、1894年11月にサモアに着いた。彼らも世間の新婚夫婦と同様、希望に胸をふくらませていたに違いない。彼女は1895年5月3日に、3,600グラムの女の子を出産し、それから3週間後に死亡した。その子ヘーゼル・ムーディーは、父親が伝道を続けている間、地域の聖徒たちの手で育てられた。そして1年後、アメリカに向かう汽船の乗客の中に、4人の帰還宣教師とムーディー長老の娘がいた。記録には、「シオンの愛する親族にあずけられることになった1歳のヘーゼルもいた」とある。

イエス・キリストの福音がサモアの地に確立されるにあたっては、それにふさわしい代価が払われたのである。その代価の多くが幼い子供たちによるものであったことは注目に値する。サモアのあの小さな墓地と同じような墓が、世界各国にたくさん人知れず立っているのではないだろうか。それは、この神権時代の伝道の初期にあった試練と苦難のもの言わぬ証人である。

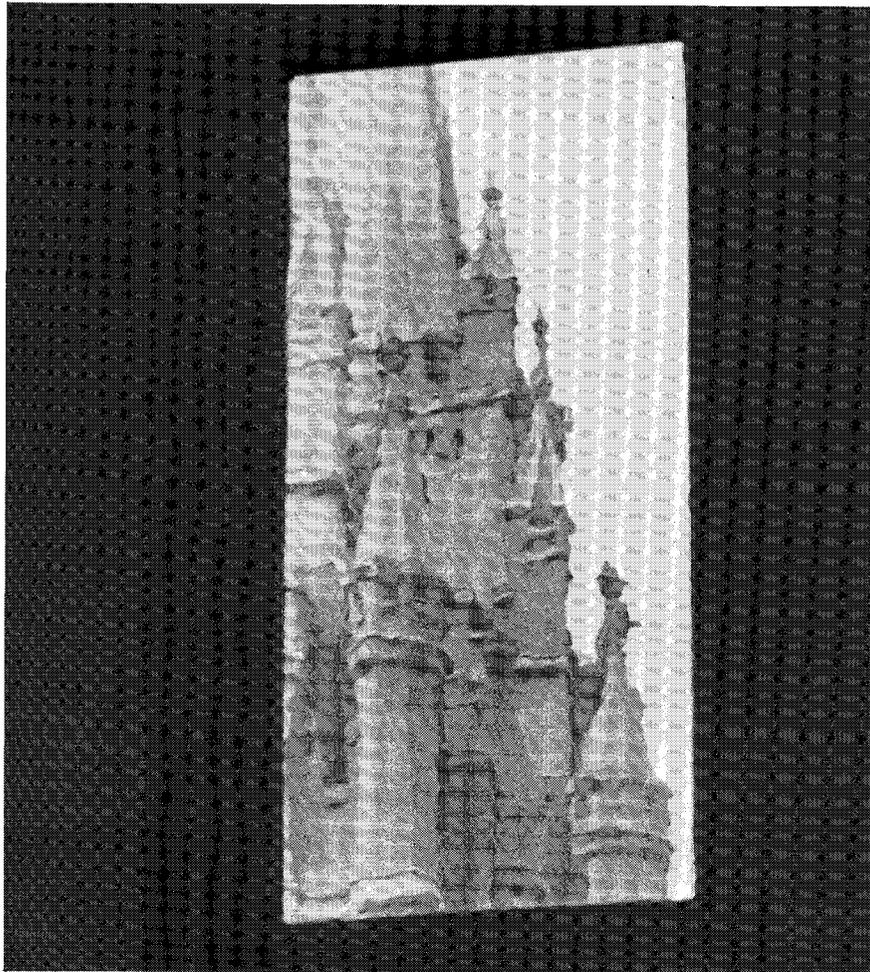
生活水準の向上と医療技術の進歩により、この種の試練はほとんど過去のものとなっている。サモアでは現在宣教師は皆健康である。医療奉仕宣教師もあり、その中にはふたりの子を持つ若夫婦がいて、教会員の衛生水準の向

上や、必要とあれば宣教師の健康にまで援助を与えている。

現代の犠牲は、大半が時間と金銭の犠牲である。立派な青年の2年間の犠牲が、主の大義を推進している。また、み業を興そうと命を捧げた人もいる。しかし主は今日、み業を世界に推し進めるために、私たちにいくらかの時間と財産を犠牲にすることを求めておられるだけである。

第二次世界大戦の終戦が近い頃の話である。ある夜、連合軍側の一将校が軍を査閲するために前線へ出向いた。彼は歩きながら、無人地帯を指さしては、「君らには彼らが見えるか。彼らが見えるか」と問いかけた。

### インフォメーション・センターの窓を通して神殿をのぞむ



間もなくしてひとりが聞いた。「将校殿、何も見えません。どうということなのですか。」将校はこう答えた。「君らには見えないのか。戦友たちだ。きょう、きのう、それにおととい死んでいった仲間たちだ。あそこにちゃんといる。君らを見ている。君らは何をしようとしているのか、自分の死は無駄ではなかったのかと。」

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちはこの教会の会員として、同じことが言える。「あなた方には彼らが見えるか」と。彼らとは、この末の時代に王国の福音を打ち建てようとして、多くの犠牲を払い、命までも捧げた人々のことである。それはヒルトン家の人であり、ロバーツ家の人であり、スチーブンス家の人、ムーディー家の人、さらにその他多くの人々である。あなた方や私と同様、神の召しに応えた人々のことである。彼らは、み業がどう進んでいるか、残した霊的な遺産を私たちがどうしているか、自分の死は無駄ではなかったかと、折々に私たちを見下ろしているに違いない。

若い男性の皆さんに聞きたい。イエス・キリストの福音のために、子供を3人までも人里離れた寂しい墓地に埋めたあの若い父親に、あなた方は車を買いたい、ステレオが欲しい、あるいは学業を中断するのはいやだなどという理由を掲げておいて、伝道の犠牲が大きすぎると言えるだろうか。

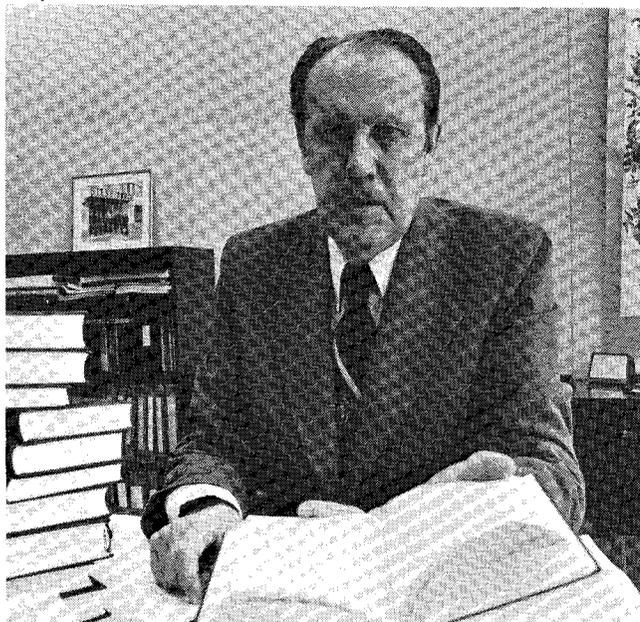
私たちは教会員として、ただ忙しすぎるから、あるいはちょっと恥ずかしいから福音を隣人に紹介できないと、だれかに語ってはいないだろうか。その相手は、伝道中に新妻を亡くし、主への奉仕が終わるまで幼い娘を親族の手に託した若い父親であるかもしれない。

今は予言者の声に耳を傾ける時ではないだろうか。歩みを早める時ではないだろうか。王国の福音を世の人々に、隣人に教える時ではないだろうか。イエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

# 質疑応答

この記事の解答は、問題解決の一助として与えられるものであって、教会の教義を公式に宣言するものではない。

「今日でも、異言を語る賜はありますか。」



解答者 カ一兄弟

「ある」というのがその答えである。

しかし、何かその証拠となるものを求めておられることであろう。恐らく、その証拠が無数にあるために、かえってそれに気付かないでいるのではないだろうか。

質問のテーマがテーマであるだけに、何か劇的なものとか、尋常でないものなどを求めていて、そのようなものを見なければ、賜があるという証拠はつかめないと考えておられるのかもしれない。

この質問を完全に理解するために、まず、聖典では賜の目的についてどう教えているか、それを理解することからはじめよう。ジョセフ・スミスは、この原則について、次のように言っている。「異言の賜は、言葉の通じない人々に説くために与えられた。」(*History of the Church*「教会歴史」2:607) 聖典の教えと末日の啓示に基づいて、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、次のように言っている。「異言を語る賜が今までに止んだことはない。」(「福音の質疑応答」p.185) さらに「異言を語る賜は、おそらく他のいかなるみたまの賜のよりもひんぱんに人の目に

触れている。外国語で福音を宣べ伝えるために旅立つ宣教師には、もし彼がよく祈り、信仰深ければ、この賜が与えられる。」(「福音の質疑応答」p.186)

何百という証が、これまで宣教師によって述べられており、注目すべき経験も、教会の歴史に記録されていて、この賜の存在を裏付けている。デビッド・O・マッケイ大管長(*Gospel Ideals*「福音の理想」p.552)をはじめ、アロンゾ・A・ヒンクレー長老(*Answers to Gospel Questions*「福音の質疑応答」2:32-33)や、その他最近の教会指導者にもそのような経験がある。

この神権時代の偉大な指導者のひとりであり、また、献身的な少年宣教師であった、ジョセフ・F・スミス大管長は、特別にこの賜に恵まれ、ハワイ人に彼らの言葉で福音を教えた。あるとき次のように語っている。「私について言えば、もし主が、母国語で人々に教える能力を私に与えられるなら、あるいは私の話を聞く人々に理解できる言葉で教える能力を与えられるなら、私にとってはそれで十分な異言の賜である。」(「福音の教義」I, p.244)

ほかにも非常に顕著な例があるが、それについても考えてみよう。現在、世界の32カ国語で、聖典の言葉やその他の教会の出版物を翻訳する仕業が進められている。英語を完全に知っているとは言えない多くの翻訳者たちが、英語で記された福音を読み、研究し、そして、それを自国語に翻訳している。不断の努力と訓練とによって、この人々は、自分に与えられた賜をみがき、その道に熟練しているのである。これらの信仰深い人々は、オリバー・カウドリの物語から心の励みと刺激を受けている。あるとき、オリバーは翻訳しようとしたが、うまくいかなかった。そのとき、主は次のようにオリバーに言われた。「見よ、汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願いし時はこれを与えらるるならんと思えり。

されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。

されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり、そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。故にわが与うるにあらざれば、聖きことを汝録すを得ず。」(教義と聖約9:7-9)

現在言語訓練伝道部で、多くの宣教師が、外国語で福音を宣べ伝えるための準備にあたっているが、これも皆、聖典の言葉が成就するためである。教義と聖約第90章11節に次のように書かれている。「その日、イエス・キリストを啓示するために彼らの上に注がる『慰め主』の施したもうによりてこの能力を授けられたる者たちの口より、あらゆる人々は己が国語と己が言葉にて完全なる福音を聞かん。」また第1章2節にはこうある。「誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば、一人ものがる者なし。目として見ざるはなく、耳として聞かざるはなく、心として刺し貫かれざるはなし。」

1853年7月9日付の大管長会発行の一般書簡には、ここで問題になっていることに関連して、極めて啓発的な声明が含まれている。それを紹介しよう。

「モルモン経を、天の下のあらゆる国語、言語に翻訳し、それを出版しなさい。これを神が機会を与えられるがままに行ないなさい。今この時から、異言の賜と、その賜による翻訳は、イスラエルの長老たちに一層明らかになるであろう。その結果、いかなる国家も、王国も、民族も、氏族も、地上で神のみ言葉の行きわたらないところなくなるであろう。」

この奇しき賜によってのみ神の目的は成就する、ということ、この解答を結べないであろうか。現在は、よろずのものが回復される神権時代である。「汝らすなわち十二使徒会、および汝らと共に汝らの助言者および指導者として任命を受けた者たち、すなわち大管長会員にこの神権の権能末の世にこれを最後に附与せらる。而して、この末の世に時満ちたる神権の時代存するなり。」(教義と聖約112:30)

全世界に福音の真理を宣べ伝えるに際して、神のみ力によるこの賜の回復がなかったならば、そのみ業がいかに困難なものになっていたか、考えてみていただきたい。イエスは、よろずのものが回復されることを明らかにするために、次のように言われた。「確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。」(マタイ:17:11) 回復の必要なものが数多くあったが、異言の賜もそのひとつである。そして、教義と聖約を読めばわかるように、それは実際回復された。主はここで、数々の賜を列挙しておられ、その中に、前述の賜も含まれているのである。(教義と聖約46:24)

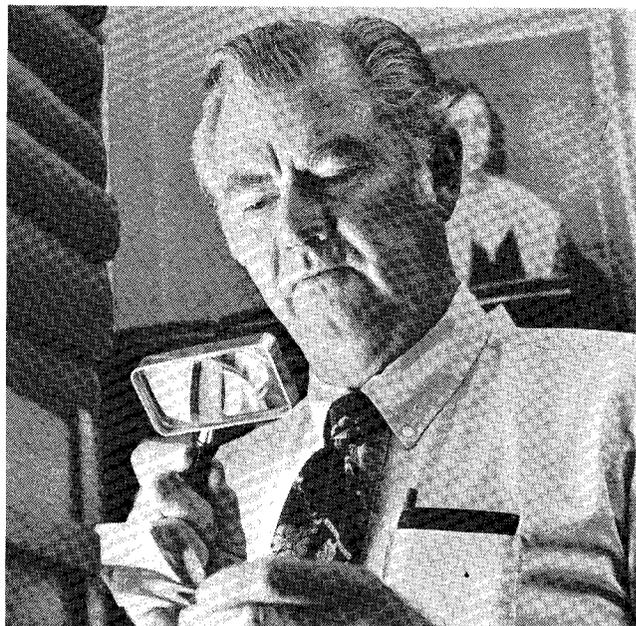
これから申し上げることは、私たちになじみの深い様々な物語ほど劇的なものではないかもしれない。全体から見てほんの一面ではあるが、教会で翻訳活動に身近に接している私たちにとっては、大きな証拠となるものである。それは、主がこの賜を持つ人々を、必要な所で、必要な時にその任に就けておられることである。

330万の教会員が、228ヵ国、3,000種類以上の言語や国語を話す。約37億人の中に混じって、世界中に散っていることを考えてみていただきたい。人類に永遠の救いをもたらす福音の回復の目的は、一体、どのようにして成就するのであろうか。主が、この異言の賜を持つ人々を世界の各地に配置し、そこでそのような人々が主のみ手の器となつてはじめて、可能になるのである。そして、母国に住む人々も、職業上の理由で一時的にせよ恒久的にせよ母国語とは異なる言語を話す国に住みついた人々も、地上に神の王国を建築するためのみ業に深くかかわっているのである。これは、その人々が祝福されて、異言の賜を持っているからにほかならない。

ジョン・E・カー

配送翻訳部長

## 「考古学上の発掘品の中に、 モルモン経の記録を実証する ものがあるでしょうか」



解答者 チェスマン兄弟

モルモン経の書かれた目的は、それに登場する民の完全な歴史記録を再現することにあるのではない。モルモン、モロナイ、ニーファイという3人の主要著者が、霊的な面の記録を要約し、その中で、非常に長期間に及ぶ記録に継続性を持たせるため、必要最低限の歴史的な史料を挿入したものである。それゆえ、外的な証拠があったとしても、それは主に、その経典が歴史に基づいていることを示すものとして重要なだけであって、霊的なメッセージにとってはそれほど重要ではない。記録には霊的な教訓が数々含まれているため、読む側としては、記録の正当性を立証するために霊的な経験をする必要がある。その証を持つための方法は、モルモン経のモロナイ10:4-5に書かれている。**結局、モルモン経の立証は、霊的な領域に属するものであって、考古学的な研究によるのではないのである。**

確かに証は、この記録を祈りの気持をもって研究して初めて得られるものであるが、モルモン経を立証する外的な証拠も数多くある。また、もうひとつ心に留めておかなければならないことがある。それは、モルモン経には、アメリカ大陸の「全」住民の記録を書き残した、とは書かれていないことである。アメリカに渡来した「3」民族の霊的

面の記録なのである。

科学上の発掘によって、スペイン人がアメリカへ渡る前からアメリカ大陸には素晴らしい文明が存在していた、ということがわかってきた。人々は、建築の分野で数々の偉業を遂げ、実に見事な農業灌漑水路の工事にあたり、金銀の細工に秀で、綿密な都市計画を持ち、政治や宗教の分野で立派な組織を持っていた。生活のほぼ全般にあって、このアメリカ・インディアンの古代原住民たちの築き上げた文明は、ローマやギリシャの壮麗さと比較して少しも見劣りのしないものであった。モルモン経にも、同じように、神殿のある大きな都市や、金、銀、美しい織物に恵まれて高度に発達した文明についての記述があるが、これを読んで、モルモン経の真正さを証明する証拠とはできないであろうか。

この記録では、極めて宗教的色彩の濃い一政体が、その教えに反対する民と絶えず戦争をしていたことがその中心になっている。学術的な研究によれば、アメリカ原住民の多くは、その根底に宗教的な影響を受けていたものと推定されている。モルモン経中で最も影響を与えた人物は、イエス・キリストである。イエスがアメリカ大陸を訪れたことが本文中に記録されている。古代アメリカの伝説は数多く、アメリカ大陸に散在する様々な部族に今日まで伝えられているものもある。その中で最も根強く残っている伝説のひとつは、ひげをはやした白い神の物語である。その神は彼らの先祖を訪れ、教えを施し、祝福を与え、再び訪れることを約束したと伝えられている。このふたつの話が酷似していることに気付かない人はいないであろう。かつてアメリカ大陸には、発達した文明が存在していた。モルモン経は、そのような古代社会の栄枯盛衰の物語である。

現在のアメリカにあたる地域に住んでいた原住民たちの文化、文明は、その最盛期を取って比較してみると、当時存在した他の民族の文明に比較しても優るとも劣らない程であった。多くの学者は、コロンブスのアメリカ発見前の文明の最盛期は、キリストの時代とほぼ一致する、と断定している。

現在の、壮麗とは言いがたいインディアンの文化を研究している者は、かつてアメリカ大陸に存在したあの壮大な文明に一体何が起こったのか、いぶかしく思うであろう。あの見事な道路を築き上げた人々は、どこにいるのだろうか。この人々は、旧世界のものと変わらぬ偉大な神殿や宮殿を造り、そこを歩きかう人々のために、見事な道路網を築き上げたのである。モルモン経に記述されているこうした民族の物語と、最近の考古学上の発見やインディアンの伝説を比較すると、興味深い類似点がいくつか見られる。

人を偏りみることのない神ならば、旧世界と同じく新世界でも、確かに人々を訪れ、教えを施し、何百万という民との交流の記録を残されることであろう。事実、モルモン経と同様、古代インディアンの歴史の翻訳でも、このことが明らかにされている。数多くのインディアンの伝承の中から、大洪水、箱舟、水が分かれたことなど、聖書中の出来事についての知識を持っていたことがうかがえる。スベ

イン人たちは、新大陸に上陸の折、皆この話を聞かされたのである。

モルモン経の中には、考古学や民族学の研究の結果明らかになったことが数多くある。モルモン経の記録を実証しているもの、更に、モルモン経時代以降の高度に発達した文明に深くかかわっているものの中から選んで、次に列挙してみた。

考古学上の証拠	モルモン経
メソ(中央アメリカ)や南アメリカの観光地にあるような建造物	IIニーファイ 5 : 15 モーサヤ 8 : 8 9 : 8, 11 : 8
非常な強度を誇るセメント	ヒラマン 3 : 7, 9, 11
コルテスの説明にある塔	アルマ 48 : 1, 50 : 4
南アメリカを14,400キロにわたって縦横に走っている道路網	Iニーファイ 25 : 11 ヒラマン 14 : 24
車輪——車を使ったおもちゃが数多く発見されている。	IIニーファイ 12 : 7 アルマ 18 : 9
旧世界のものと似た武器が発見されている	アルマ 23 : 13, 25 : 14 ジェロム 1 : 8
冶金術——金、銀、銅を含む	ヒラマン 6 : 9 イテル 10 : 23
内科外科治療を施した跡	アルマ 46 : 40
見事に組織化されていた神権政体の跡	アルマ 4 : 20 13 : 6

文明が高度であった証拠は、古代アメリカの数学、天文学、さらには、いけにえ、バプテスマ、聖餐、割礼、不死不滅の信仰など、宗教的事柄に関する知識から明らかである。このような証拠に、他の数ある証拠を加えれば、モルモン経の真正さははっきりと実証できるはずである。

モルモン経の中には、考古学的研究からは今なお立証されていない、歴史的、文化的概念もまだ存在するが、これは注目するに値する。しかし、これは極めて当然のことである。まだこの分野の研究は新しく、今世紀の初め頃研究が始まったばかりだからである。だが、新しい発見をしたという報告は絶えない。時間さえたてば、モルモン経の中で、現在考古学的な資料に乏しい分野でも、充分その主張の裏付けとなる証拠も発見されてくることであろう。確かに、考古学上の発掘から、モルモン経の内容で偽りであると立証されたものはない。そして実際、モルモン経を支持する証拠は数多い。

私は、古代アメリカの研究をモルモン経の研究と並行して行ってきたが、モルモン経の物語を実証する例は、枚挙にいとまがない程である。

ポール・R・チェスマン博士  
ブリガム・ヤング大学  
古代聖典学助教授

# “あなたの信仰生活にとって、 「聖徒の道」とは何か”

——「聖徒の道」愛読者と語る——

「聖徒の道」は、1968年3月に国際機関誌として創刊以来、教会員や教会外の一般の方々に多くの励ましや導きを与えてきました。このたび、当編集部では、全国の愛読者の中から6名の兄弟姉妹にお集まり願ひ、日頃「聖徒の道」に対して抱いておられる感想やそれにまつわる経験、証詞等をきたんなく話していただきました。

## 出席者

日本神戸伝道部徳島支部	浅田 章子
日本仙台伝道部仙台支部	阿部 順夫
日本札幌伝道部札幌支部	片桐 秀子
日本名古屋伝道部岐阜支部	後藤 康夫
日本東京伝道部高崎支部	阪本 真一
日本福岡伝道部普天間支部	比嘉 邦子

司 会 「聖徒の道」編集部

(出席者名五十音順)

司 会 お忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。きょうは、「聖徒の道」を皆さんがどのように読まれているのかお伺いしたいという気持ちから、お集まり願いました。さっそくですが、阿部兄弟は、いつごろから読んでいらっしゃるでしょうか。

阿 部 そうですねえ。求道者の頃から読んでいました。昭和28年ですから……22年前になりますか。当時はまだ「聖徒の道」という雑誌はなくて、「L. D. S. メッセージ」という新聞だったんですよ。ご存知ですか。



司 会 そうしますと、国際機関誌発行以前からの愛読者でいらっしゃるわけですね。

阿 部 そうということになりますね。

司 会 片桐姉妹はいかがですか。

片 桐 ええ、1959年に改宗しましたが、その頃からずっと読ませていただいています。私の改宗当時、「聖徒の道」がすでにあったかどうか、ちょっと忘れてしまっていましたけれど……あったんですね。

阿部 59年ですか。今のように国際機関誌としての形をとっていませんが、ありましたよ。

あの頃は日本中が活字に飢えていた時代でしたよ。日本語の本は、聖書とモルモン経と信証講義……

浅田 信証講義というのは信仰簡条の研究のことですか。

阿部 ええ、そうです。それっきりしかなかった。だから、大管長や伝道部長のメッセージはみんな夢中で読みましたよ。

片桐 そうでしたねえ。あの頃の「聖徒の道」には扶助協会のレッスンも載っていましたね。本当に直接私たちの信仰生活にかかわりのあるものでした。

阿部 そう、私なんかは、時代の新しい状況に対処する方法をほとんど「聖徒の道」で教えられた、と言ってよいと思いますよ。

### 記事から受けた励ましや導き

司会 阪本兄弟は「聖徒の道」を読まれて、どのくらいになりますか。

阪本 私は1970年、万博の年の12月にバプテスマを受けて、……そのときから読んでいますから5年目になります。

司会 比嘉姉妹は？

比嘉 7年半くらいです。

浅田 私は4年になります。

後藤 僕は悪い方の模範生でして……（笑）教会に入ってから2年半近く申し込まなかったんです。だから、まだ半年ぐらい。

司会 今は建築宣教師として働いていらっしゃるんですね。



後藤 ええ、そうです。召されて、やっと購読するようになったんです。（笑）今になって、もっと早く読めばよかったと思っています。つまずきそうになったとき、「聖徒の道」がいつも導き手になってくれるんです。

司会 皆さんもそのようなご経験があたりだと思えますが、お聞かせ願えません。合わせて、「聖徒の道」をこう活用しているというようなことも、あれば聞かせていただきたいと思えます。

浅田 心に悩みがあるとき、「聖徒の道」の中にその答えを見つけることがよくあります。霊的によい状態のときには、自分自身をもっと励ますことができるし。

後藤 心の準備になることもありますね。僕は、祝福師の祝福を受けに行くとき、汽車の中で「聖徒の道」を読んで素晴らしい準備をすることができたんです。

比嘉 私は、今「聖徒の道」やその他のテキストの索引を作っているんです。信仰とか、聖霊の導きとか見出しをつけて整理するんです。

阿部 あ、それ、私の妻もやっているんですよ。毎月2冊とりましてね。バラして記事ごとに分類して、スクラップブックにまとめるんです。まだ、数年分しかやっていますが、大変重宝していますよ。

比嘉 いろいろな問題にぶつかったとき、すぐ解決の糸口を見つけることができますし……お話やレッスンの準備にも活用できますね。

後藤 すごいな、僕もやろうかな。

阿部 是非やってくださいよ。福音実践の最高の知恵袋になりますよ。

司会 知恵袋ですか、なるほどね。皆さん、なかなか積極的に「聖徒の道」を活用していらっしゃるんですね。

片桐 「聖徒の道」は私にとって、判断力を養う大きな助けになっているんですよ。今の時代に関する大管長や幹部の説教が、たくさん載っていますからね。

阿部 それは言えますね。一昔前よりも聖典に近くなった感じですね。

司会 阪本兄弟、いかがですか。沈黙を守っていらっしゃいますが。

阪本 いいえ、心の中でいちいち深くなづいていたんですよ。（笑）聖典も同じですけど、読んでいると神様のことを考えるので、思いを高めることができ、その日一日が充実した日になるんですね。逆に読まないでいると、標準や思いが少しずつ下がってきて……よくないですね。



浅田 そうですね。私もそうだよ。

司会 皆さんに、特に印象深かった記事についてお聞きしたいのですが。

片桐 私は、少し前のことになりましたけど、「ベトナムの日曜日」という記事。

阪本 あれは感動的でしたね。死んだものと判断されて死体置場に置かれていた兵士が、神権の力で回復したという記事でしょう。

司会 そして、回復したとき「しんけん……」とつぶやいたという……

片桐 そうです。教会初期の会員や第二次大戦後のヨーロッパの会員の証もいろいろ。

比嘉 いつだったか、歴代大管長の特集がありましたよね。私はあれを読んで、神様のみ業の偉大さに、本当に感動しました。

阿部 私は、60年頃の12月号に載っていた、マッケイ大管長の「クリスマスの精神」というメッセージ、あれが印象深いな。

司会 後藤兄弟はいかがですか。

後藤 僕は、最近の記事でしかお話できないんですけど、マッコスキー長老の「長老」という記事が印象的でした。神権の尊さを考えさせられて……。

阿部 今、建築宣教師だから、なおさらでしょう。  
後藤 そうなんです。長老と呼ばれるたびに、その言葉の重みを感じられるんです。……（沈黙）主は私のような小さな者にも、この天国と地上を結ぶ力を与えて下さっているんですね。主の期待と愛、そして私たちの使命を感じました。

比嘉 使命と言えば、ハロルド・B・リー大管長の「女性であることを誇りにしなさい」というお話はよかったですわ。



浅田 私は「聖典の中から答えを見つけなさい」という記事ですね。あの記事から、1年半にわたって悩んでいた問題を解決する素晴らしいアドバイスを得たんです。大げさかも知れないけれど私はあのときから生まれ変わったような気がしているんですよ。

阪本 決して大げさじゃないと思うな。「相反する原則」という記事があったでしょう。あの記事は僕の大きな疑問を、見事に解決してくれたんですよ。

浅田 そういう経験って、ありますよね。

阪本 悩んでいるときに、友だちから勧められた記事を読んだら、そこに解決法があったりね。時には、僕の心を見抜いているようにズバリと書いてあって、恥ずかしくなって、悔い改めたいと強く思いますよ。……それから、僕はローカルニュースが好きですね。兄弟姉妹の証は本当にいいですね。

片桐 やはり、そうですね。私の友だちもそう言ってますよ。ローカルニュースのページの改宗された方々の体験が一番感動的で、教えられることも多いって。

阪本 そうですよ。それまでの生活から新しく生まれ変わるには、大きな困難があるでしょう。勇気もあるし。そういう改宗談は、同じような問題にぶつかっている人々への励ましになると思うんです。

司会 そうでしょうね。

後藤 そう言えば、僕もまず開くところはローカルのページだな。

比嘉 私も、とっても楽しみにして読んでいます。

後藤 あのページを読んでいると、ああ、ここにも主のために働く仲間がいたんだ、なんて思うときがありますね。

### ローカルページにほしい内容

司会 期せずして、ローカルのページが話題になりましたね。紙面の都合で、余り多くを載せることはできませんが、ご意見、ご希望をお聞かせください。

後藤 やはり同国人の体験談や証はいいですねえ。何か直接ピンと来るところがあって。

阪本 私たち自身の証も強められますね。

浅田 でも、ステーキ部の会員の記事が多いような気がしませんか。もっと地方に住んでいらっしゃる兄弟姉妹の証や教会の様子を知りたいですね。

阿部 昔はバプテスマ情報や支部紹介もありましたね。ああいうのも楽しみだったなあ。昔はローカルが大半だった。

後藤 そうでしょう。この間、十何年か前の「聖徒の道」を読む機会があったんですけど、おもしろかったですね。知っている人のことがたくさん出ていて。

片桐 そう、以前はそうでしたね。教会が発展して、組織が分かれていくにつれ、会員の交流も少なくなるのかなと思うと、ちょっと寂しい気がしますね。

後藤 今、日本に住んでいる聖徒たちがどんな活動をしているか、教会がどんな発展をしているのかがわかるといいな。それから、今どこで新しい教会堂が建られているかとか……。

阿部 そうですよ。最近旅行して感じるのは、他の伝道部やステーキ部に行くと、どこに支部があるのやらわからないということなんです。昔は支部の所在地が「聖徒の道」に載っていましたから、すぐわかりました。

片桐 今は、それだけワード部、支部の数も増えた、ということかしら。

司会 そうですね。

比嘉 一度各伝道部か地方部ごとの特集のようなものを、なさったらいかがでしょうか。それぞれの地方の特色や実情がよくわかると思うんですけれど。

片桐 それはいいわ。日本各地の活動や発展の様子を知りたいですね。

浅田 外国で暮らしている日本人の証なんかも。

片桐 そうね。

阿部 トピックニュースや人物紹介の国内版。ローカルのページは今や全国唯一の共通の広場ですからね。3行記事でもいいから、各地のニュースがほしいですね。



片桐 無理なお願いかも知れませんが、ローカルニュースの誌面をもう少しふやしてほしいですね。例えば、ワード、支部、伝道所の紹介というような記事も時には載せていただきたいと思います。

阿部 狭いながらも楽しい誌面(笑)

### 伝道に役立てた経験

司会 ローカルのページに関しては、皆さんが積極的なご意見・ご希望を持っていらっしゃるの、うれしく思います。これを機会に編集の方でも、いろいろと考えてみたいと思います。ところで話は変わります。

すが「聖徒の道」を伝道に役立てた経験をお持ちでしたら、聞かせていただきたいと思います。比嘉姉妹いかがですか。



比 嘉 そうですね。伝道と言えるかどうかわからないんですけど、結婚前なんか、家族の関心をひきそうな記事が載っていると、そのページを開けて、一番目のつきやすいところに置いたり、(笑)……それから、親戚の家へ送ったりしました。

阿 部 私は、親戚には毎年クリスマスプレゼントとして、1年分贈呈予約しているんです。

司 会 素晴らしいクリスマスプレゼントですね。

阪 本 私も以前、両親に贈っていたんですよ。でも、すみっこではこりをかぶっているのを見たときは、残念だったな。(笑)……それから私じゃなくて、妻なんです。財布を拾って届けてくれた人に、半年間「聖徒の道」を贈りましたよ。素晴らしいお礼の方法だったと思うんです。

司 会 なるほどね。後藤兄弟はいかがですか。

後 藤 うーん、私はそれほどたくさん伝道する機会がなかったんですけど、ホームティーチングなんかで、よく「聖徒の道」の中の話をしましたね。フェロシップにも使いました。

浅 田 私は、学校の友だちに教会のことを紹介するときに使います。よく貸してあげたりするんです。

阪 本 僕も大学生のとき、アブラハムの書の特集したエンサインを古代オリエント史の教授に贈りました。

比 嘉 わりと気軽に送ったり貸してあげたりできますものね。

阿 部 そうですね。雑誌ということで、抵抗なく受け入れてもらえますね。

比 嘉 私は、子供のページだけ切りとって、近所の子供たちにあげたりするんですよ。それから2冊あるときは、求道者にプレゼントしたりもします。

阿 部 教会に来ていない会員を訪問するときに持って行く、思わぬ導きを与えるようなこともありますね。

後 藤 そうですね。本当に。……

司 会 いろいろ役に立っているようですね。

### あなたにとって「聖徒の道」とは何か

司 会 では、しめくくり、皆さまにとって「聖徒の道」とは何か、一言ずつ。阿部兄弟は最初の方で、福音実践の知恵袋とおっしゃいましたが……。

阿 部 ええ、そうです。私にとってはその一言に尽きます。

司 会 奥様のスクラップブックの完成を楽しみに。

阿 部 はい。(笑)

司 会 片桐姉妹は？

片 桐 教会幹部から導きを受ける場、かしら。私にとっては、聖典と同じように大切なものです。

阪 本 同じです。今日の聖典ですね。

浅 田 私にとっては、自分を省みる機会と行動を起こす勇気を与えてくれるもの、かしら。

司 会 後藤兄弟は？

後 藤 ……そうですね。素晴らしい糧と勇気を与えてくれる、証のかたまり。(笑) イエス・キリストと同じように、求めるときに、必ずそこにいてくれるんです。

司 会 ありがとうございます。きょうは「聖徒の道」が皆様にいかに親しまれているかがわかり、有意義なひとときを過ごさせていただきました。初めての試みでしたが、活発なご意見、ご希望を聞かせていただけたことを、感謝しています。皆様の建設的なご意見ご希望を取り入れ、親しまれる「聖徒の道」を発行していきたいと思います。本誌から、多くの導きや励しをお受けになりますよう祈っております。

## 永遠の生命と救いに導く 靈感に満ちた指導書

皆様方のすべてが家庭で「聖徒の道」を購読されるよう、勧めるものである。それは日本語を話す人々にとって唯一の公的な教会誌である。この本を読み、そこから得られる偉大な真理を生活に生かしていただきたい。実に、我々は今の時代にあって、永遠の生命と救いに導く靈感に満ちた指導書を持っているのである。

キリストの教会の会員にとって「世において世のものとならない」ためには、深い知識と知恵、そして救い主の教えに対する強い信仰が要求される。「聖徒の道」は、主の教会にあって、「聖徒をととのえる」ために活躍する雄々しい力の一端である。

大管長 ジョセフ・フィールディング・スミス

聖 徒 の 道

1976年1月20日発行（毎月1回20日発行） 第20巻第1号  
昭和42年12月18日 第3種郵便物認可

